
デルタ・ブルー

十洲海良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デルタ・ブルー

【Nコード】

N2642R

【作者名】

十洲海良

【あらすじ】

私の夫の彼女は、とても綺麗な変人だ。けれど、彼女の家族は、もつと変。三角関係は奇妙な均衡を保っていたが、第三者ならぬ第四者の介入によって、すべてが狂いだす。

サイト『コトバノトリコ』からの転載です。『コトバノトリコ』で次話を先行掲載しています。

<http://id53.fm-p.jp/234/mstory/>

(序) 事件は突然に起こる

いま生きている自分の日常が簡単に崩れるなどと、誰が想像出来るようか。毎日垂れ流されるワイドショウやニュースが報じる事件の数々。ごく当たり前に、普通の営みを送る普通の人間に、ある日突然、事件は起こる。事件の重大さは、善悪に比例しないままある種の不平等さをもって平等に、わたしたちのもとへやって来るのだ。そして、わたしたちと言えばそれを回避する方法を知らず、原因も思い当たらず、ただおろおろたえては愚かな対策を思いつくだけ。自分だけは皆とは違う、だからきつと大丈夫、などと根拠のない自信を噛み締めたところで、何の解決にもなりはしないと頭では理解しながらも、当事者になるはずがないと、敬虔なまでに信じて。

わたしもそれに洩れなかった大勢のうちのひとりに過ぎない。平凡な両親のもとに生まれ、普通にすくすくと育ち、大学を出てすぐにつつがなく結婚し、今に至る。
あんなふうにして、平穏な毎日が崩れるとなどは、本当に思わずにいた。だってそれまで、その日はいつもと何にも変わりなかったのだから。

01 美しい娘

私には森崎さんが必要なの、と雛子は当然のことのように言うので、わたしは黙ったまま、惘然と見下ろす雛子のそれはもう自信ありげに潤ませた眼と今日の彼女の服装を交互に見比べている。どちらが正当なことを言っているのかと問い詰めたい気持ちも多分にして湧き上がるのだけれども、年端もゆかない。といっても雛子はもう二十歳だし、分別があつてしかるべきなのだが、どうも彼女にはそういった価値観は通用しないらしく、今に至る。小娘に、食つてかかるといふものおとなげないような気がして、とりあえず雛子の言い分を黙って聞いているようなありさまだ。雛子の口から出てくる森崎というのはわたしの名字だが、雛子が必要としているのはわたしでなくわたしの夫で、つまりは雛子と夫はそういう関係なのだった。不倫相手の妻の前に堂々と姿を現す雛子の度胸には感心すら覚えるし、雛子の話を聞いているうち、それが至極まっとうな言い分のような気がしてくるのだ。これが雛子のすごいところである。

雛子は夫の前では文字通り大人しい（らしい）のだが、『大人しい』と『おとなげがある』ということの違いが未だによく理解出来ないわたしは、雛子の勢いにいささか気圧されながら、奇妙な娘を面白がるようにして眺めている。

黒くまっすぐな髪を眼の上で切りそろえた彼女は、子供の時分に家にあつた日本人形によく似ていて、白くて細くてつくりものみたいにきれいな顔立ちをしているのだが、それはとても冷たく近寄りがたい感じがするので、おくてな森崎が、こんな女の子を落としたことの方がわたしには興味深い。

わたしは当事者にもかかわらず、夫と雛子が持ち込んでくるその

光景を冷静に眺めることが出来、一体なぜそうなのかと問われれば、これがまた明確には答えられないのだった。彼女が興奮しているからだろうか、雛子は感情的になると大きな目が潤むのだ。最近発見した彼女の癖は、以前に何の考えもないまま指摘してみたところ、雛子はあからさまに不快感をあらわにしてわたしをなじった。考えなしに、というのは厳密に言えば嘘で、あまりにも真剣な雛子をかかってみようという、意地悪な気持ちから出たことは間違いない。当たり前なことだが、わたしは雛子のことを好いているわけじゃない。

たしかに、この構図はおかしいしあり得ないけれど、此処で声を荒げてみたところで何の解決にもならないことは火を見るより明らかで、第一、怒るべき相手は彼女ではなく、彼女と恋をしている夫の方ではないかと思うのだが、ためしにいつペン夫を詰問してみたところ、泣いて土下座という何とも気分の悪い展開になってしまい、それきり、面倒で夫には詰め寄っていない。雛子が事あるごとにわたしの浴びせる、挑発めいた言葉に乗るつもりもないし、第一、彼女はどうして此処がわかったのだろうと考えるけれども分からない。夫が教えるとも思えないし、妻が行きつけの飲み屋なんて、完全にアウェイじゃないのか。日付が変わろうとしているような時刻に単身乗り込んでくる雛子は、正気の沙汰ではないのだが、そのくせ、雛子はどう見ても正気そのものだし、自分の言っていることをちゃんと理解しているようでもあり、それにわたしが指摘すべき事柄ではないように思える。わたしは、あくまで雛子の大好きな森崎さんという人の配偶者にすぎず、雛子とは直接的には何のかかわり合いもないのだ。

黒沢雛子です、と名乗られたのは去年の春先で、どういうわけか其処にはわたしの夫が同席していて、彼は至極すまなそうな表情で大きな背をひたすら丸めていた。満開の桜が散り散りになりはじめ

た晩春、夜になれば冷気はまだ容赦無く、薄手のカーディガンにサ
ンダルという出で立ちのわたしは、あくる日風邪気味になったのを
思い出した。あの時、雛子はまっすぐに立ち、まっすぐにこちらを
見ていて、わたしはあれほどに挑戦的な視線をいまだかつて向けら
れたことがない。きれいな目だと思っただが、それと夫のことは別で
ある。あなたたちの事はどういう算段になっているか知れないけれ
ども、残念ながら離婚する意思はないと言つと、雛子は一瞬涙ぐみ
すぐにそれを翻して敵意丸出しの目を向けた。要求の通らなかつた
子供がかんしゃくを起こす、あるいは、逆切れというのに近いよう
な感じだつたことを覚えている。離婚を否定された夫はひどく安堵
した顔になり、それを見た雛子は憤慨して帰ると言い出し、本当に
雛子は話の終わらないうちに店を出て行ってしまい、間抜けなこと
にその直後に注文した雛子の紅茶が運ばれてきた。それでこの話は
終わるのかと思っただが、夫はまだ雛子と付き合っているらしい。も
う一年にもなる。

夫のクレイジーな彼女は、短大を出て目下花嫁修業中　いわゆ
る家事手伝いという気楽な身分におさまっているらしく、花嫁修業
中に妻帯者と付き合っているこの矛盾について問いただしてみたい
といつも思うのだが、雛子を眼前にすると、彼女のテンションの高
さにそんな企みは吹っ飛んでしまう。でもいつか、全然修行になっ
ていないよと指摘しよう　とわたしは考えている。

雛子は本当にきれいな子で、同じくらい変わっていた。

余程時間を持て余しているのか、わたしの行動をキャッチしては
やれ相応しくないだの、森崎さんを頂戴よと言ってくる。それも、
結構な頻度で。今週など、雛子に会ったのはこれで二度目だが、わ

たしの見る雛子はいつでも同じようにハイで、感情のヴォリュームが全開の状態はすごいと思う。正直なところ、わたしには真似出来ない。もしかしたら雛子は、常に酔っ払いなのかもしれない。

恋に狂うとはこれか、などと感心している場合ではないけれど、感心に値するひとだ。もう面白いがるほかに、わたしに何ができるといふのか。

「…座つたら？ 何か飲めば。おごつてあげる」

「よほど自信がおりなのね。わたしにおごるだなんて」

そうじゃなくて、面倒だから酔わせて送り返そうかと、とは言わずにおいた。ますます面倒になりそうだ。

「テンちゃん、おかわり。梅酒ロック」

空になったグラスを押しやると、カウンターの青年は困ったように笑った。新しいグラスの中では待ち構えていたように、琥珀色の液体に浮かんだ氷が音を立てる。青年が笑いを崩さずに言った。

「もう、リンさんまで絡まないでよ？」

雛子への当てつけのつもりらしいが、本人には全然つたわっていない。

騒　　ガヤ　　という店の名前は、若い店主　　カウンターの中の、ひとときわ身体の大きな青年、宇佐美天、皆にはテンちゃんと呼ばれている　　がつけた。狭くてごちゃごちゃ、いつも音楽の流れるこの店の空気に、その名前はぴったりだ。テンちゃんの母親は元

タスナツクを経営していたが、それを自分が継ぐときに改装したのだ、といつだったか彼は教えてくれた。

テンちゃんは人懐こい笑みの柔和な男の子だが、アマチュアレスリングに青春を費やしたという肉体は、着ているＴシャツを少しばかり小さく見せている。

南米の変なお面やあやしい木彫りの像、無名の誰かが描いた傑作の絵、古本が山積みのがやは、近所で唯一わたしの休息所だ。なのに、わたしのオアシスは最近とても騒がしい。

「言いたいことは言ったから、帰ります」

テンちゃんは片眉だけをつり上げて、珍しそうに雛子を見る。いつもなら、ここから更に雛子はヒートアップするのだ、いつもなら。

「今日はいやにあっさりね」

「珍しい」

うんうん、と頷くテンちゃんも、さすがに雛子の存在に慣れたらしい。たいていの場合、雛子とわたしの不毛なやりとりに業を煮やしたテンちゃんが仲裁するか、手に負えなくなつて夫を呼び出すというパターンが出来つつあり、雛子が自主的に退去することは滅多にない。

当の雛子はテンちゃんの物言いも意に介する様子はなく、紺色のワンピースから伸びる美しい脚シャキシャキと動かしながら、店から颯爽と出て行った。その後ろ姿を見送りながら、なんだか複雑な気分になる。今しがた帰って行った娘が、自分の妹のように錯覚し

たのだった。

「帰ったわね」

「帰りましたね」

「…ヒナコ、大人になってきたのかしら」

「また、そういうことを言う。まともに取り合うことないでしょ？
リンさん、被害者なんだし」

テンちゃんは本当に心配している。そうだろうとも。こんな奇妙な事態が、普通にごろごろしていたらたまったものではない。

「まあ…客観的にはそうかもね。でも」

疑問符のついた表情で、テンちゃんは視線を投げてよこす。

「…森崎のことは抜きにしても、あの子面白いじゃない？」

瞬く間に、テンちゃんの眉間に皺が寄った。

「本当に…リンさんの思考回路って解せない」

テンちゃんは少なくとも常識 何をもって常識とするかはさておき のある人だし、概ね正しい。けれども、正しいと正しくないの二つだけで、全ての事柄が片付くわけではない。わたしはそう

思っている。テンちゃんや周りの人から見れば、なるほどわたしは被害者だろう。若くて美しい娘に、愛する夫を奪われた。

けれどもわたしは、微塵もそんな考えを持たない。野暮です、被害者だなんて冗談はやめてと言いたくなる。男と女の良いも悪いもない、とわたしは考えるし、問題は、恋に落ちられるかどうかだけなのだ。そして夫と雛子は恋に落ちた。正確に言えば、恋に落ちた雛子に、夫は押し切られた。

雛子に好意的な感情を持っているわけではないし、夫の浮気相手という事実は変わらない。雛子の存在を認めるつもりもなかったが、雛子を知った時に泣いて喚くことだけは自分の仕事ではないと思った。いずれどちらかが相手に飽きて恋を放り出すまで、わたしは傍観者を決め込むことにしたのだ。夫と雛子のことなのだから、わたしの出る幕はないように思えたのも事実だ。

君はそれで構わないのか？

夫の、狼狽したような震えた声。思い出すと可笑しくて仕方ない。そんなにうるたえるぐらいなら、最初から浮気なんかしなきゃいいのだ、ばか。

わたしの夫はとても優しく、優柔不断で、頭が良くてとてもばかだ。それはすべて、長所であり短所だ。夫婦愛ゆえの盲目さだと笑うひともあるかもしれないが、わたしはおそらく幸せなのだ。夫との生活を大切に生きるほかに、わたしに何が出来るというのだろうか。

01 美しい娘（後書き）

作業BGM:

”天使の死” music by Astor Piazzolla
from”QUINTETO NUEVO TANGO”
（

02 雨、喫茶店で

『… 森崎さんの、お宅でしょうか』

受話器から流れてきたのは、硬質で低い男の声で、わたしにはまるで聞き覚えのない声で、はて何処のどなた様かと、眠気の抜けない頭でぼんやりと思った。間抜けすぎるほどうらかな陽射しが差し込む小春日和、昼下がりにその電話はやってきたのだった。

書き物をしていたはずなのに、いつの間にかうとうととしていたらしく、何度目かわからないベルを聞きながら慌てて電話を取り、聞き覚えのない声に考えを巡らした。夫の会社の人だろうか、私の仕事の電話だろうか。自宅の電話に掛けてくるひとなど、わたしか夫の両親か、仕事関係くらいしか思いつかなかったのだ。

「はい、そうですが」

『森崎秋彦さんの、奥さんでいらっしやいますか？』

さつきから質問ばかりだ。どうやら仕事の電話とは様子が違う。わたしは突っ伏していたダイニングテーブルから体を起こして、受話器をつかみ直した。

「…そうですが、どちら様でしょうか」

見知らぬ人から掛かってきたら、普通はそう訊くものだ。だから、尋ねた。思いもよらない答えが返ってきたところで、ようやくわたしの意識は眠気から脱却した。ほんとうに、目が覚めるような返事。

『 黒澤尚人と、申します。黒澤雛子の兄です』

「…え？」

雛子の兄！ 雛子に兄弟がいたとは。あのわがままっぷりと奔放さは、一人っ子のそれだと決め付けていたわたしは少々驚く。雛子の兄という人がいきなり電話を掛けてくる非常事態よりも、そのことが気になってしまいうわたしは重症かもしれない。

『あの、妹のことで 奥さんとお話をしたいと、思いまして。突然にすみません。お時間、作っていただけませんか。都合は合いませんから』

若い男に奥さんなどと呼ばれるシチュエーションは、なんだか三文小説みたいで現実感がない。こんな事を思うのは不謹慎だろうか。

『日時と場所を指定していただければ、伺います』

「はあ…」

『無理でしょうか？』

夫に聞いてみないと、と言い掛けて口をつぐんだ。雛子の兄が電話を掛けてきただなんて、夫が聞いたら挙動不審になるのが関の山だ。あるいは、また見当違いの対策を練り始めるか。イレギュラーな事態に強い性格でない夫は、あの時だって死んでも死に切れないだのなんだのと喚いていて、諫めるのにどれほど掛かったかわからない。

『奥さんは、ご存知なんですよね、妹のこと』

知らなかったら、このひとはどうするつもりだったのだろう。当事者の妻に向かったのっけから雛子の兄だと名乗るあたり、やはり雛子と同じでずれているのかもしれない。黒澤某はわたしの返事を待たずに続ける。

『とにかく妹のことで、ご相談がありました。一度お会い出来ませんか』

わたしは相談なんかありません。とは言えなかった。それくらい相手は非常に真剣な声だ。

黒澤雛子の兄と名乗るその人は、本当に丁寧な受け答えをするひとで、おそらく生来の性格がそうさせるのだろうが、まどろっこしいことこの上ない。雛子の単刀直入な性格とは対照的だ。会う約束を取り付けるだけで二十分を要し、電話を切ったわたしは疲れ果てた。

雛子の兄。どう考えても話というのは夫と雛子の恋愛に違いなく、おおかた二人を別れさせたいといった類の相談に決まっている。わたしだって、自分の妹が得体の知れない妻帯者と付き合っていたら、同じようにするかもしれない。すくなくとも夫は、得体の知れない男ではないが。

夫と知り合ったのは大学時代のことだ。同じような本を読み、同じような映画を好んだわたしたちは、当然のことのように気が合った。当たり前前の様に交際に発展し、夫が就職するのを待って結婚し

た。その頃わたしはもう、素人相手に絵を教える先生じみた仕事についていて、しかしその実態は主婦のパートのような気楽さだった。教室は自宅から自転車で十五分、わたしは自宅界限だけをテリトリ―そのまま現在に至る。もちろん、夫はそのことについて了解してくれていた。

はずだったのだが。

もしかしたら夫は、雛子のような女性と結婚したかったのではないだろうか、と考えるようになったのは、雛子のが発覚してから二ヶ月くらい後のことだ。雛子ならきつと、夫を寂しがらせたりはしないだろう。鬱陶しさと紙一重の雛子の情熱は、彼女にあつてわたしにないもの一つだと思うようになった。夫は、雛子の子供じみた情熱を愛しているのかもしれない。

「…すみません、呼びだしておきながら、遅刻とは」

降ってきた声に顔を上げると、傘を携えた青年が立っていた。大学生くらいだろうか。背が高く、線が細いところは雛子によく似ている。雛子と違うのは、髪がくすんだ茶色だったことだ。染めているのかもしれない。雛子のまっすぐで綺麗な黒髪とは違い、兄のそれはくせが強く見える。濡れた前髪が束になり、頬のあたりで波打っていた。白人かと思うような白さは、遺伝だろうか。雛子も、おそらく不健康そうな白さだ。

「…降ってきましたね」

窓の外に目をやると、雨が降り始めていた。冷え込むはずだ。銀の糸のように音もなく落ちるそれは、降ることに寒さを運んでくる。気づけば、もう十月も終わる。雛子と初めて会ってから、半年。

「初めまして。黒澤尚人です」

「どうも、森崎の家内です」

雛子が現れてから、わたしは奇妙な光景にはかり遭遇している。

「妹のことでは、奥さんにとっても迷惑をお掛けしていると思います。本当に申し訳ありません」

だしぬけに黒澤が頭を下げた。白昼のコーヒーショップで、男に謝罪されるわたしはどのように見られているのだろうか。わたしは慌てて黒澤に、頭を上げるように懇願した。

「謝ってくださいなんて言ってないでしょう?」

そうですねと呟きながら、それでも黒澤は申し訳なさそうに俯いた。大きな背中を窮屈そうに丸めて。まるで居心地の悪い猫のように見える。

「妹　雛子の事ですけど」

「はあ」

自分でも、気の抜けた返事だと思う。

「その 雛子が、森崎さんと…あなたの旦那さんと、その、お付き合いしているというのは本当ですか」

とても言いにくそうに、黒崎が告げる。訝る目は真剣そのもので、わたしは黒崎のお陰で深刻な類の話だと思ひ出す。

「それは、妹さんからお聞きになったの？」

あの雛子のことだ。あっさりと話したかもしれない。あるいは、頑なに依怙地になっている雛子。どちらもあり得そうで想像にたやすい。

「…家の近所で、車で送られてくる妹を見ました。今年の三月ぐら이었다と思います。その時尋ねたら、妹は答えませんでした」

湯気を立てるコーヒーを前に、黒澤は全く手を付けない。このコーヒーは結構、美味しいのに。言ったら機嫌を損ねるだろうか。わたしの思惑など気づかずに黒澤は続ける。

「しつこく問い詰めても言わないので、興信所に調査を頼みました。そしたら相手は既婚者だと云う。しばらく様子を見てきましたが、別れた様子もないので僕がこうして、一度ご相談しよう」と

本当は森崎さんとお話したかったのですが、と黒澤は付け加えて黙った。

「興信所…？ あなた本当にそんなことをしたの？」

「ええ。父の耳に入る前に片付けておかないと、もっと厄介ですから。あなたはお分かりかどうか分かりませんが、なにぶん、妹は厄

介な性格なので」

まるで雛子の世話係だ。兄というのは、そういうものののだろうか。わたしには兄が居ないので分からない。こんなふうには保護者にならなくてはいけない黒澤を、わたしは同情的な目で見てしまふ。奔放な雛子。心配性の兄。そして夫。妙な疎外感を感じた。みんな、雛子に振り回されて生きている。

「わたしがこう言うのもなんだけど、相談相手にわたしは向いていないと思うのね」

「…え？」

そこでようやく、黒澤と目が合った。正面から見据える青年は、案外雛子に似ていなくてわたしは何故か安堵する。

「あなたの相談というのは、想像がつかます。ヒナコと夫を別れさせたいのですよ？ でも、別れさせることが出来るような妻だったら、とつくにそうしてるわ」

冷たいようだが、これが事実だ。別れさせるなど考えることので出来る常識的な人間だったら、話はもっと簡単に済んだはずなのだ。雛子は、今よりもっとヒートアップしているかもしれないが。

「…このままに、しろと？」

気色ばんだ声は、まるで弦楽器のように響く。決して大きくはない声だが、大きく空気を震わせて届くその声は、怒りを含んでいないはずなのに心地よい。こんな事を考えているわたしは、やっぱり不謹慎なのだろう。

「…黙認じゃなくて、静観。出来ませんか」

難しい顔をした黒澤は、伸びた前髪をくしゃくしゃと弄り直し、小さく溜息をひとつ吐いた。

「今みたいな状況が永遠に続くということは有り得ないの。始まったら、いずれ、何かしらの結末を迎えるものよ」

「だから今は口出しをするなど？ あなたは、自分の夫が他の女と

」

「別に、賛成じゃないけど。たとえば反対して、泣いて喚いたらどうにかなる話とは思えない。彼女と夫のことは、彼女と夫が決めるしかないのよ。少なくとも、わたしにとってはそういう話よ」

「大人、だからですか。そういう考え方が出来るのは」

大人？ 何が大人かなんて、わたしには分らない。結婚しているというのに、雛子に振り回されている夫は、わたしよりも2つ大人のはずだが、やっている事は子供同然だ。目前の若者のほうが、よほど大人のような気がするのよ、わたしの見当違いだろうか。

「あなたはおいくつ？」

唐突に降ってきた質問に、黒澤は怪訝な顔をしながら二十四、と答えた。相変わらず、コーヒーは手付かずのまま。

「わたしは三十よ。そんなに違わないわ。これは単に考え方の違いでしょう？」

わたしが雛子のことを責めたてないことと、大人の分別があるということとは違ふとわたしは思う。それが、果たして黒澤に伝わるだろうか。四角く切り取ったような青年に、こんな馬鹿々々しい話を飲み込ませるほうが無理というものだろうか。黒澤の立場から言えば、これは由々しき事態だし、一刻も早く妹の間違いを正したいだろう。誰だって、大事な人があらぬ方向に逸れてゆくのは嫌なものだ。

「わからない」

ひどく傷ついた様子で黒澤は呟いた。

「僕にはわからない。自分の夫が、他の女といて嫌じゃないんですか。嫉妬しないんですか？ 自分の…」

「嫌に決まってるでしょう？」

思いのほか大きな声に自分で驚いた。カウンターに居た客が何事かと振り向いて、こちらを窺っている。ばつが悪いことこの上ない。

「でも、わたしの気持ちと、夫と雛子の間にあるものは、別のことなの。わたしが泣いて頼めば、二人は別れるとでも？ 違うわ。隠れて会うだけのことよ。だったらいっそ、」

「黙認して把握しておけばいいと？」

途端に、黒澤の表情が険しくなった。わたしは次に言うべき言葉を見つけられず、ただ黙るほかない。

「不倫ですよ？ 由々しき事態だ。雛子は責められて然るべき立場なのに、それを全く理解していないんです。 だからどうか、それとなく雛子を諭してもらえるようお願いできませんか」

今日の主旨はきつとこれなのだろう。黒澤はごつても、雛子のことについていることを認めがたいらしい。当たり前かもしれない。これが、当たり前前の反応なのか。当たり前前の、常識的な。

「夫がそれを出来る人なら、とつくにそうしているわ。わたしに知られる前にね」

「奥さんから言われれば、雛子も反省するかもしれない。いけないことをしている、という意識が芽生えるかもしれない」

本当に、この兄は妹に対して盲目だ。自分の妹のことわからないのだろうか。

「…雛子 彼女の家族ならわかるでしょう？ あの子は、他人の意見に惑わされるタイプじゃないわ。少なくとも、わたしの言うことに耳を貸すとは思えない。黙って見ているしかないのよ。わたしたちは、当事者じゃない。それと」

意気消沈した黒澤は、まだあるのかといった顔でわたしを見た。

「あなたに奥さんって呼ばれるのはなんだかしっくり来ない。凜です、森崎凜」

黒澤が、しつげの行き届いた青年であることはわかった。良識をしっかりと持っていることも。その兄を持ちながら、同じ環境で育ったはずの雛子がどうしてあなのか、わたしには皆目見当もつかない。

い。両親は、娘に対しては甘すぎたのだろうか。

「失礼なことばかり言って、すみませんでした」

帰りしな、黒澤は深々と頭を下げた。この人に謝られるのは何度目だろうか。半時間ほどの間ずっと、黒澤は済まなそうにしていたのが気にかかった。きっと疲れただろうに。わたしもどっと疲れてしまって、最後は愛想笑いさえ出来なかった。雛子と夫のことを第三者に話すことが、こんなに困難なことだとは思わなかったのだ。多分もう会うこともない青年は、濡れた傘を広げて通りの向こうへと消えていってしまった。ついに、コーヒ―は飲まれないままに置き去りにされ、代金は強固に譲らず、黒澤が支払った。妙に頑ななところは、雛子に似ている。

雨は、霧のような細かさでまだ降り続いていた。

02 雨、喫茶店で（後書き）

黒澤尚人は、別作品『感情と溶解』に少しだけ登場しています。

作業BGM：

”交差する”music by World's End Gir
l friend) from”Kukki-Ningyo”O.S.
T.)

03 再会と炭酸

ただいま。おかえり。おはよう。こんにちは。こんばんは。おやすみなさい。

毎日、律儀に同じ挨拶を繰り返すのは何のためだろうか。

同じ顔をつき合わせていれば、誰だって飽きが来る。それが解るからこそ、わたしは夫を責め切れないでいた。他に目移りすることを、実行するか、あるいはしないか。その違いだけが、責められるべきかそうでないかを決めるのだとしたら、その物差しは、いったい何処からやって来るのだろうか。

もちろん、実行に移してしまった方がより悪いのだということもわたしは知っている。けれども、世間や社会の決めたことすべてを自分の人生の上で通そうとしたら、少し窮屈なものも確かだ。規則や倫理は、完璧にわたしたちを守るだろう。けれども、そこには愉しみも刺激も、生きている実感さえないのではないだろうか。

「…雛子のお兄さんに会ったんだって？」

夕食の最中、夫がぼつりと言った。味が濃くなってしまったカレーをつつきながら。

夫は、夜はこうして律儀にわたしと食卓を囲む。四角四面な夫は、その慣例をほとんど破ったことがなかった。雛子に会うまでは。

「ヒナコに聞いたの？」

黒澤に口止めをしていなかったなとわたしは思い出す。けれど別に言われて困ることではない。むしろ、困るのは夫と雛子だろう。

「…うん。兄が突然押しかけて、済まなかったって。奥様に謝っておいてって」

「電話で？」

「うん、電話で」

夫に会わない日は、きちんと電話を掛けてくる雛子。彼女のほうが奥さんみたいだ。わたしは複雑な気分になりそうになる。

「ヒナコって変なところで律儀よね。遺伝かしら。ヒナコの兄尚人っていったっけ。あの子もコーヒー代は自分が払うって聞かなくて。そういうところ似てるかも」

「…ふうん」

夫は力なく箸を止めると、食べるのを止めてしまう。なんとなく面白くなさそうで、わたしは内心楽しくなってしまう。いつもと立場が逆だなんて！ 夫のこういう反応を見られたのは意外な発見だった。

「何の話をしたんだ」

「別に大した話をしたわけじゃないわ」

それは本当だ。結局話し合いは何の変化ももたらしていない。

「お兄さん怒ってたんじゃないのか」

戦々恐々と訊いてくる夫の様子は本当に面白い。お兄さんだなんて、自分よりもだいたい年若い青年に向かつて云っている可笑しさに、このひとは気付いていないのだろうか。大きな身体に相反して優しすぎて、人の機嫌ばかりを気にして、そのくせ大胆な行動に出てはわたしの度肝を抜く。

「怒っているどころか謝られたわ、それも何回も。こう言ったら失礼かもしれないけど、ヒナコのお兄さんなのにとっても礼儀正しくてびっくりした」

「…」
「ごめん」

わたしの言葉は嫌味に受け取られてしまったようで、夫は心底、居心地の悪そうな顔で箸を止めている。この状況で平然としていられても、それはそれで困るけれど。

「おおかたの話は秋彦も聞いてるんでしょう?」

「…まあ。彼女、お兄さんと大喧嘩したらしい。それに幼馴染が絡んできて、面倒臭いって本当に嫌な顔してた」

そりゃあそうでしょうとも。

「お父さまの耳に入ったらとても困るって、兄が云ってたわ。厳格なおうちなんでしょう?」

「昔から続いている能面師の家系らしい。雛子の父親で十一代目だ。」

先々代は人間国宝だよ、たしか」

それは初耳だ。ヒナコは文字通りの箱入り娘ということか。わたしは妙に納得する。あの変な娘も、浮世離れた感じの兄も。

「それはお耳に入れたら非常に困るわね」

「…うん」

すっかりしよげてしまった夫。叱られた子供みたいな顔でご飯を放り出して。夫はほんとうに雛子を愛しているのだろうか。それとも、雛子にかまう自分を、愛しているのだろうか。あるいは、そのどちらでもないのか。わたしは夫ではないから、夫の気持ちを外側から推し量ることしか出来ない。もつとも、自分の感情などという恐ろしく変わりやすいものにわたしが信頼を寄せるかどうかはわからない。それこそ、アウトオブコントロールの範疇だ。

きまぐれで、勝手に、結婚してもなお妻らしい行動など取らずにわたしは今まで生きてきた。結婚したからといって、赤の他人同士が一心同体になれるわけではない。婚姻というつながりはあっても他人は、他人のままだ。それは家族であっても同じことだろうとわたしは思っている。自分と、自分以外のだれか。それ以外のラベルの付け方を、わたしは知らない。夫はおそらく、そのことについてはわたしを一理解出来ないとも思う。

それでも。

わたしがずっとこの先を一緒に生きていく相手は森崎秋彦で、それは変わらないとおもつ。

そうであって、欲しい。

雛子の話題が夕食に出た三日後、もう二度と会うことはない
と確信していたわたしは、自分の予感に裏切られる結果になった。

黒澤と喫茶店でのやり取りがあつた翌週、黒澤はわたしが教えて
いる絵画教室　ビル全体がカルチャースクールの教室になつてい
て、わたしの教えている教室はその一室にすぎない　に現れたの
だつた。わたしが教えているクラスの生徒はほとんどが女性で
それも子育てを終えて自分の時間を持ち始めた、五十代以降の年代
が圧倒的に多い　その中に、見学者の札をぶら下げた、若い（そ
れもきれいな顔立ちの）青年が混じっている光景を想像して欲しい。
浮くの浮かないのの問題ではないくらい、黒澤は違和感を醸し出し
ている。しかもそれに気づいていないのだから性質が悪い。

その姿をご婦人の群れのなかにみとめた時、本当にぎよつとした
頭ひとつ飛び出た黒澤は、目が合うなり屈託のない笑顔でわたしを
迎えたのだ。まるで、親しい人に会つた子供のような顔で。この間
とはひどく印象が違っている。手でも振つてわたしの名前を呼びそ
うなくらいだ。どうか名前なんて呼ばないで欲しいというわたしの
祈りが伝わつたのかどうかはわからない。

あの日、わたしは自分の仕事のことなど一言も口にしなかつたは
ずだし、どこで職場のことを知つたのだろう。お得意の興信所？

わたしはたちまち攻撃的な気分になった。

家族同士のことならまだしも、他人の私にその矛先が向くのは納得がいかない。第一、わたしがなにをしたというのだ。

「…じゃあ、先週の模写の続きから始めます 質問のある方は手をあげて下さいね。あと 見学者の方、ちょっとこちらへ」

目で黒澤を促し、廊下に出た。どこのクラスも今は授業中で廊下は無人だ。舞踊のクラスが使っているタンゴが微かに聞こえてきて、ビルの残響と混じり合って風に溶けていく。春は過ぎ、けれども夏というにはもう少し掛かる間の抜けた初夏の、この空気がわたしは好きだった。

「あなたがなんで此処に居るの？」

非難を込めて黒澤を見上げる。黒澤はきよとんとした眼をこちらに向けて、その数秒後には少し肩を落とした。

「絵でも習ってみようかと ってこれは冗談ですけど」

「どうして此処を知ってるの？ わたし、教えてないわよね？」

どうしても語気が荒くなる。また興信所に頼んだのか、という一言はかろうじて飲み込んで、わたしは落ち着くために息を吐いた。ヒナコのことだってこんなに気分は乱れない というかヒナコの場合は彼女のほうが桁外れに感情が昂ぶっていることが多いから、わたしは大抵の場合、圧倒されて自分の感情なんかに構っている暇はないか、あるいはテンちゃんと一緒に傍観者になっているのだ。黒澤は淡々としていて感情が読み取れない。それがいけない

のかもしれない。

「ここに来たことは謝ります。でも、おれ、凜さんと話したくて」

黒澤はしょげた顔をしながら小さく呟いた。

「この間…交渉は決裂したような気が、するんだけど？」

「はあ、それはそれで、ちゃんと理解してます」

「じゃあほかに何を話すの？」

少なくとも、わたしは話すことは何も無い。黒澤には悪いが。突き放すように彼を見たけれど、黒澤にはそれは全然伝わらない様子だ。夫といい目の前の青年といい、男というやつはなんて鈍感なのだろう。自分の鈍さも棚に上げたまま、わたしはそんなふうに見える。黒澤はわたしの思惑など意に介さず、長い前髪の向こうで眼をきときと輝かせ云った。

「この間は妹と旦那さんの話しかしてなくて、おれ、あなたがどんな人なのか知らないって、あとから気づいたんですよね。だから、今日は凜さんとおれの話しようと思って来ました」

テンちゃんの言葉を真似て云うのならば　本当に、本当にこの兄妹たちの思考回路は解せない。

「仕事先のことは、妹から無理に聞き出したんです。すみません」

仕事が終わるのを待つと言い出した黒澤は、やっぱり先日のように譲らず、ビルの向かいにあるファーストフード店でわたしを待ち構えていた。

この頑なさはしつこさと紙一重じゃないだろうか。このあたりもやっぱり雛子に似ているような気がする。もとい、順番から言えば雛子が彼に似ているのだった。

雛子から聞き出したのだという黒澤の返答に、わたしは溜め息をついた。

それを彼は否定的に受け取ったようだったが、溜め息の理由は安堵だ。黒澤がこんな場所まで訪ねて来る。それ自体は不快なものに違いなかったが、興信所云々でなくて良かったとわたしは心から思う。やましいことが無くても、そんなところに調査される立場はとても気持ちのいいものではないだろう。わたしは身辺調査をされた雛子と夫を気の毒に思う。ほんの少し。

「で、わたしはあなたと何を話せばいいのかしら？ 夫とヒナコのこととは抜きなんでしょう？」

紙のカップにはいったコーヒーは香りも抜けていてぬるい。一方、黒澤はジンジャーエールを飲んでいて、馬鹿々々しい比較かもしれないが、夫なら絶対にありえない選択だと思いつながらそれを眺めた。夫は炭酸が苦手なのだ。

「…雛子の話でもいいんですけど。というか、凜さん、この間だいぶ怒っていらしたでしょう。それが気になって。おれ、悪いことし

たなつて後からものすごく反省しまして。そもそも、奥さんに妹のことをお願いに行くつて非常識だよなつて思つたんです。親友片岡つていうんですけど、そいつに無茶苦茶説教されて。ばかじゃねえの、つて」

わたしも最初は馬鹿かと思いました、とは云わずに黒澤を眺める。雛子の云つていたという幼馴染は、黒澤の親友らしい。同じ話を夫と黒澤、それぞれから聞く羽目になつてわたしは変な気分になる。

狭いテーブル越しに佇む青年は、淡いグレーのシャツに草臥れたカーゴパンツを穿いているた。ちよつと其処まで煙草を買いにといつた装いで、夫のそれとは大きく違ふことに気が付いた。夫はコンビニでさえしつかりと支度をしなければ行くことが出来ない。几帳面すぎる夫はいつでも小綺麗な服と髪型で完全装備している。付き合ひ始めの頃、わたしは夫に良く叱られたものだった。寝間着みたいな格好で外に出るのは止めなさい、と。実際は寝間着じゃなくてルームウェアだったのだけれど。

夫と黒澤は、正反対のタイプかもしれない。そこにヒナコの反発と云おうか意思と云おうかが滲みでている気がして、わたしは笑いそうになつてしまふ。

「面白いですか」

「ええ。ヒナコもだけれどあなたも相当、変わつてるわよね。会うのが二回目の人にこんなこと言うのも失礼だけど」

「おれには、奥さんのほうがよっぽど変わつて見えますよ。普通じゃないと思います。つて、この間の繰り返しになりそうですね、この会話」

「そうね」

「…で、考えたんですけど」

「考えた…？ なにを？」

鸚鵡返しに訊いてしまった。

「おれとデートしませんか。他人の奥さんにこんなこと言うのもすごい非常識だつてことは、知ってます。だけど、これくらいしない」と 妹は自覚してくれないんじゃないかと思って「

あなたは静観してろつて云うしと黒澤は付け足して、はにかむように笑った。照れたような困ったような、受け止める側によってはどうしても解釈出来てしまいそうなその表情は、大抵の女の子の感情を揺らすには十分すぎるくらいに魅力的だった。そこにわたしが含まれるのかどうかは、別として。

しかし。なんだつてわたしが。

甚だ心外な申出に、わたしはきつと鳩が豆鉄砲 よりもひどい顔をしていたかもしれない。

04 ナシゴレン、あるいは本当のこと

「で、リンさんは、デートの約束をしてきたわけ？ 相手はヒナコのお兄さんでしょ？」

「デートってほどのものじゃないでしょ。美術館に一緒に行く約束を、しただけ」

「それをデートって言わないで何をデートだと思ってるの？」

恐ろしい速度でレスポンスがあり、グラスを拭く手を止めないままテンちゃんは呆れたようにわたしを見つめた。やれやれ、この人妻は何を考えているんでしょうか、と独りごちる。すいません、と心の中で謝罪する。

「…あのさあ、前々から思ってたんだけど、リンさん、相当にひねくれてるよね」

「ひねくれてるっていうのは…ちょっと心外なんだけど」

「じゃあ、アマノジャク？」

「…それは反論できない」

テンちゃんは呆れ顔だが、実はこういう時にもっとも不謹慎なタイプでもある。内心は、『相当に』面白がっているに違いないのだ。どう思っているのか察しがつく程度には、テンちゃんを理解しているつもりだ。へたな親族よりもずっと、テンちゃんのほうが理解出来るし彼とはとても気が合う。それはもう姉弟のようだと わた

しが勝手に思っているだけだが。

「　　テンちゃんと先に会ってたら、わたしテンちゃんと結婚してたかしら」

「何言ってるんのリンさん。それ、絶対はない」

真顔、しかも全力で否定するあたりが悲しいが、テンちゃんの恋の相手はいつでも男の子だ。わたしなんぞは到底、相手にはなれないのである。その代わりと言うのは変だが、テンちゃんの好みがそうだからこそ、わたしと彼は心置きなく仲良くなれるのだ。しかも、適度な距離を保ったままで平行線を描きながら。

「秋彦さん、いい人じゃん。ヒナコとその一連の煮え切らなさを差し引けば、だけど。なかなか寛容だと思うよ？　リンさんの仕事とか趣味には口はさんだりしないでしょ？　ま、寛容ってのはルーズの裏返しだからね…一長一短」

鋭すぎる挙げ句に的確なコメントをしないで欲しい。ぐうの音も出ないわたしは、空になったランチ　今日はナシゴレンだったの皿をテンちゃんに押し戻した。

「…で、お兄さんの話でしょ？　男前？　ヒナコとそっくりなら、線が細い感じの綺麗な子って感じがするんだけど、どうなのその辺は？」

一息に疑問を投げかけたテンちゃんの手が、カウンターを挟んだ向こうから大きなグラスを差し出す。中ジョッキと変わらないくらいのシロモノに、アイスティーはなみなみと入っていた。これは確実に事情聴取の雲行きだ。

「男前、なんじゃない？ 世間から見れば。わたしは良くわからないけど」

「リンさんの好み、世間から外れてるもんね」

「それを言うでないよ、キミ」

わたしたちは、どちらからともなく笑いあう。

昼下がりのガヤは、昼時の波が去り客はわたしひとりである。ランチタイムを終えた店はとうに準備中の札が掛けられているはずで、余所様から見たらこれも不倫に見えるんだろうかと馬鹿げたことを考えた。密室に男と女だもの。無論、それだけが恋の組み合わせではないことを、ここに居る当人たちは重々承知しているのだが。

「…でも、人妻にデートしましょうとはなかなか言えないよね。さすがヒナコのお兄さんというべきか」

「それって褒められることじゃないし。それも、純粹にデートのお誘いならまだましだわ。目的はヒナコの反省なんだもの」

たしかに、とテンちゃんはずなずいて、自分のグラスにもルビー色の液体を注ぎ足す。大きなピッチャーを傾ける腕は肘から手首にかけての筋肉が盛り上がっていて、よく美術室にある石膏像　ダビデとかブルータスといった名称がついているあれ　を思い出させる。だからおそらく、彼の筋肉は美しいのだと思う。テンちゃんは少なくとも真っ白ではないけれど。

「で、なんでまたデートする気になったのさ。何か思うところがあつたから…そういう展開なんでしょう？」

「なんにもないわよ。いくらほたいても何にも出てこない」

うつそだー、と笑い飛ばすテンちゃんを横目に、わたしははたと考え込んだ。なにもない。それは確実である。しかしあの時、なぜ自分は首を縦に振ってしまったのだろう。わからない。黒澤に格別の感情を持っているわけではないのだ。魔が差しました、だなんて浮気者の常套句だろうに。

「教室のクラスに押しかけられて、近所のお店でお茶のんで、話しただけ。あ、黒澤くんはジンジャーエールだけ」

「そんなどうでもいい所を細かく説明しなくてもいいし」

「そういう所しか覚えてないのよ。煙草の銘柄がマイルドセブンで意外に普通だったとかさ」

いつも、こうなのだ。わたしは誰と何を話したという事柄ではなく、お店の照明がどうか、窓の外の様子がどうだったとか、そんな事しかいちいち覚えてこないの、おそらくテンちゃんの期待するような話は今後も披露できそうにない。無論テンちゃんは、そんなわたしの性格など疾うに知っているはずで、わたしが見当違いの話を始めても慣れたふうに軌道修正するだけ。

「ま、別に理由がなきゃいけないなんて言わないけど。でも、リンさんにしては珍しいよね。わりと慎重派でしょう？　そういうことには」

「男とか女とか、よくわかんないしね。恋愛しなきゃ生きていけないっていうんでも、ないしね。っていうかもう結婚してるわけだから、恋愛とは対極のところにいるわよね。安らぎ？ 老夫婦？ 空気がっていうの？ 勿論いい意味で、だけど」

うーん、とテンちゃんは首をかしげて煙草に火をつけた。全然納得してない顔で。

「いい意味で空気って、僕はよく分かんないな。安らげる愛も必要かもしれないけどさ、僕みたいな人間はそんなこと言ってられないんだよ。明日をも知れない感じで生きてるの。今あるものは今だけ。僕は相手を繋ぎとめておく手段が、明日以降もあるとは限らないんだから」

「きつとわたし、こういう一日が明日も続くって どこかで思いこんでるのかもしれないね。自分のぬるさが嫌になる。わたしやっぱりただの面倒臭がりなのかな？ 余計な揉め事が嫌なだけなのかな？ ヒナコのこと、ちゃんとした方がいいのかな？」

「それはリンさんが頑張るところじゃないんじゃないの？ ヒナコと付き合ってるのはダンナでしょ。リンさんじゃないよ」

リンさんは秋彦さんに甘すぎるって。

それがテンちゃんの結論だ。正しい。正しすぎて何も言えない。いつもそうだ。けれど、彼こそわたしに甘いとも思う。自分の店で渦中の妻と愛人の火花を散らされ、毎回ありがたくもない仲介役を買わされる彼の身になってみれば、申し訳ないというほかに何も出てこないのだった。たとえば、それが友情による好意から出たものだったとしても。

「でもね、秋彦がいない生活ってのは、もう全然想像つかないの。だってずっと一緒にいるんだもの」

もう伴侶は確定していて、その相手と一緒に生きる。もう、好いただの惚れただのという地点はとっくに過ぎてしまっていて、なにはともあれ二人は一緒。そこに居てくれたらそれでいい。

そう思うのに、それがなんだかしっくり来ないのは何故なのだろう。

「あ、そうだ。デートの食事は是非とも当店で。ヒナコ兄、どんな子かなあー」

テンちゃんはどうしても、実物を見ないと気が済まないらしいのだった。

04 ナシコロシ、あるいは本当のじよ(後書き)

作業BGM:

"My Favorite Things" Music by
John Coltrane) from "My Favorite
Things")

05 Rainy blue

今日もまた雨ですねと小さく呟く彼を眺めながら、わたしは差し置いて傘を畳み、手元でゆるゆると水滴を振り落とす。たしかに今日も雨で、わたしは色気のかからもない長靴を履いて待ち合わせにやって来た。初めて彼に会った日も雨で、それは土砂降りではなく静かに静かに道路や街路樹を濡らしていく、やけに詩的な、雨。

きつと黒澤は雨男なのだと言われ、彼のせいにして、わたしはバスに乗り込んだ。郊外にある美術館まで、バスで三十分。黒澤はその時間を気にするふうでもなく、当たり前のようにわたしに続いてステップを上がってきた。

「凜さん、傘」

振り向けば彼が手の平を差し出して、何のことかと一瞬考えた末、傘を持っていてくれるらしい事に思い至り、そうか、そういう事に気がつく人なのだなどと妙に感心した。夫が、気配りの出来ない男という訳では、ないけれど。もしかしたら、黒澤は物凄く女の人に慣れているのかもしれない。均整の取れた顔立ちであることは確かだし、なにより、物腰が柔らかくて、今の女の子たちはきつとこういう男の子が好きに違いない、とわたしは年寄りみたく考えを巡らす。実際、三十を超えた、それも結婚して落ちるべき恋を失った女と、これからたくさんさんの恋が待っている青年との間には大きな隔たりがあると言っている。わたしと黒澤を隔てる何か。

バスの中は、雨具や濡れた服が持ち込んだ湿気で妙に蒸していて、このまま梅雨に突入するのだろうかと考えているあいだに黒澤はわたしの隣に当然のように腰掛け

バスは乗客が多くて、余分

に空けておく座席がなかったから当然のことと言えば当然だが

わたしの隣にいるのが夫でなくて他の青年だというのが、なんだか気まずいような気持ちになった。わたしたちの関係など、乗客の誰が知っている訳でもないのに、妙に恥ずかしいような後ろめたいような気分は、久しく体験していなかった事柄の一つには違いなかった。

景色を眺めるふりをしようかと思っただけでも、曇った窓からは何も見えはしない。わたしは諦める。

「今度からは車にしましょう」

「え？」

「また次も雨だったら、車で迎えに行くことにします」

マツギモアメダツタラ。次？ 次がまた、あるのだろうか。

「次は俺の行きたいところで構いませんか」

黒澤があまりにも真剣な顔で言うので、わたしは吃驚してしまう。

「…今日の目的地にも着いてないのに？」

終わりは笑いながらになってしまった。つられて黒澤が微笑む。

「今のうちから約束しておかないと。帰りになったら凜さんが次はなし、とか言いそうで」

「わたし、そんなに気分屋に見える？」

否定の意味で首を横に振りながら、黒澤は小さな声で耳打ちした。

「俺、結構緊張してて。今日やらかしたら嫌われそうで怖いから。挽回できるように保険をかけたいだけ」

わたしがぐるぐると思考の渦に飲まれている間に、黒澤はわたしから受け取ったチケットと小さなチラシを、見たことのないもののように眺めている。まるで子供みたいに。

「こういうの好き？」と聞けば、黒澤は専門的なことはよくわからないけど、多分大丈夫と答えた。

今日の展示は現代美術の彫刻家で、略歴を見ればルーミア出身とあった。わたしの専門でもないから、詳しいことは知らない。ひどく抽象的で卵だの羽根だの。そういうモチーフばかりの、似た彫刻が延々と続くらしい。黒澤も抽象的なものは嫌いではないらしいことを知って、わたしはひとまず安堵する。ただでさえ会話の糸口が見つからないこの組み合わせで、デートの行き先など思いつかなかつたのだ。行き先は凜さんが決めていいから、というのは譲歩にならないとつくづく思った。

「俺、美術館自体初めてかもしれない」

「学校の行事とかで行かなかつた？」

「うん。うちの学校はなかつたな」

そう言うと黒澤はまたチラシに眼をおとす。初めての体験にわくわくしているのだろうか、あるいは、難解な相手に身構える準備を

しているのだろうか。無心に文字を追う黒澤からは、その真意は読み取れなかった。

先日は頑なに自分が払うと言ってきかなかった黒澤を押しきり、今日はわたしが払うと決めていた。おごられっぱなしはあまり好きじゃない。入り口でまた押し問答になりそうだったので、わたしが来たいと言ったのだからわたしが出す、と言った。黒澤は諦めた表情でわたしの後ろをついてきた。しょんぼりした子犬みたいに。

「女の人に財布出させるのってちょっと格好悪くないですか」

「それは思い込みよ。わたしもあなたも働いてるんだから、半分のこの間だって、頑固に。飲みもしないコーヒー代、払ったでしょう。あの店、コーヒー美味しいのに」

「要点はそこになっちゃうんですか？」

「そうよ」

やっぱり凜さんちょっと変、と黒澤は言う。そんなに変だろうか。

「変　　ていうか、今まで周りには居ないタイプかもしれないな。だから気になって仕方ないのかも」

そんな事を真剣に言う黒澤のほうが変わたとは言えず、わたしはどんな反応を返せばいいのか分からなくなって黙る。今日の黒澤は、変だ。ほんとうに。雛子のことは面白がれたけれど、今度はそうはいかなかった。わたしが、当事者だから？

「そんなに固まらないで欲しいです。出来れば聞き流して」

それは無理というものだ。免疫のついていない年上の女をからかっているのであってほしい。そうであってほしい。黒澤が真面目な顔になればなるほど、わたしはそんな風にひたすらに願った。

黒澤とわたしはああでもない、こうでもないと言い合いながら、展示品の順路を一時間ほどかけて回った。黒澤にはことのほか新鮮な体験だったらしく、鑑賞しているあいだじゆうはしゃいでいた。さすがに、キャツキャと騒ぐ子供のようではなかったけれど。ひそひそと囁き合う人の声が重層になってどこから音が出ているのか分からなくなる、あの空気の中で、黒澤はずっとわたしの真横で話しかけていた、ように思う。記憶はあいまいで、よく分からなかった。今日見た作品さえ細かくは思い出せない。歩き、作品を鑑賞する素振りをしながら、わたしは別のことで頭が一杯だった。それは認める。

黒澤が言った、何気ない言葉がずっと頭の中に引っかかっていた。

「凜さん？ 聞いてます？」

「え？」

呼ばれて我に返ると、眉根を寄せた黒澤が怪訝な顔でわたしを見ていた。慌てて取り繕うように笑ったが、失敗だったかもしれない。時折強い視線でこちらを見つめ返してくる黒澤は、透明な氷のよう

で怖い。何もかもお見通しだと、今にも言いだしそうなの。

茶色く色の抜けた髪は湿っているのか束になって、秀でた鼻梁に寄り添っている。その横顔はとても綺麗で、わたしは遠慮もなくしげしげと黒澤の顔を見つめた。袖から出た手や首筋は白く、けれども骨っぽいニュアンスを含んでいて、本人はおおよそ性的な印象からは程遠いのに、断片的に与えられる情報は、服のしたにどんな身体を隠し持っているのか、興味を抱かせる。不思議な、男。妹のこには本気で怒るくせに、妙に飄々として、時折含みを持ったような言葉を差し出す、妹とは違った意味で変な人。

「雨、止まないですね」

「そうね」

他愛のない世間話まで裏を読もうとするわたしは相当に嫌な人間だろうか。

「喫茶店」

「え？」

「この裏に喫茶店、あるみたいですよ。行きます？ コーヒー、美味しいかどうか分からないけど」

さっきの話を引き合いにしていることは流石に理解できる。わたしは苦々しく笑いながら、黒澤の提案に同意した。

雨。まだ止まない、雨。わたしたちの雨は、いつになったら青空を連れてくるのだろうか。

05 Rainy blue (後書き)

作業BGM:

"Pavane pour infante d?fun
te)Ravel)(music by Nobuyuki Ts
uji)from debut)"

06 フォーチュン・クッキー

話がどう廻り廻って夫に届いたのかは知らないが、美術館に行った翌日その話はもう夫の知るところとなっていて、黒澤がこれ見よがしに妹　雛子に語ったのか、あるいは何気なしにその話題を出したのかは知らない。少なくとも、美術館とその行き帰りに知人に出くわすようなことは無かったし、それを知っているのはわたしと黒澤だけのはずだったが、わたしが勝手に思い込んでいたのかもしれない。実際は、わたしを知る夫の知り合い　または、黒澤を知る雛子の知り合い　が見かけてわざわざ一報を入れたのかもしれないが、わたしは確かめる手段を持たなかった。わたしは黒澤の携帯の番号さえ知らない。(そもそも、わたしが携帯電話を携帯しないので、彼の番号を聞いたところであまり意味はないのだ。携帯は便利だけれど人間関係を台無しにする、と言うと、大抵変な顔をされる。テンちゃんにも。)

「どうして君たちが外で会ってるんだ」

夫はいかにも心外だと言わんばかりの顔つきで、やっぱり拗ねたようにご飯を途中で放り出していった。長雨がようやく止んだ朝、窓の向こうには青々とした景色が広がっているというのに、我が家の中は鬱々とした空気が流れている。発生源は夫であるのが明白。夫は、こういう可能性があることを微塵も　彼は良くも悪くもそういう性質たちなのだ　考え付かなかったに違いない。そう思うと、なんだか胸が痛くなる。はじめに仕出かしたのは夫に違いないけれど。

「ご飯、食べてからにして。遅れるわよ、会社」

わたしのその一言が癪に障ったらしい夫は、片方の眉を吊り上げてこちらをじっと見つめた。銀縁の眼鏡の向こう、普段は繊細だと揶揄される涼しげな眼が　今日は冷徹な光を帯びている。本気で怒っているのだとしたら、なんて子供みたいなんだろう。

「ご飯と会社の話をしてるんじゃないよ、今は」

「知ってるわ。だけどあなたに詰問されるようなことは、わたしはしてないわ」

反論したとたん、夫の顔には不愉快と文字が浮き出てくる。いつだって分かりやすい人　雛子のことが発覚したのだって、この人の顔にありありと”浮気してきました”と書いてあったからに他ならない。無論実際には何も書かれてはいなかったけれど、わたしにはそう文字が浮き出ているようにしか見えなかったのは事実だ。

「話をすり替えるなよ」

「　すり替えているのはどっち？　そもそも、あなたがヒナコとしていることは何？」

「だから僕はいつも君に報告するだろう？　雛子と会うのにいちいち君に報告しているだろ」

本当は、ずっと気づかないふりをしていれば、良かったのか。何も知らない、愚かなふりをして。そうしていれば、穏やかで睦まじいまま、わたしたちは居られるのか。あの時泣いて怒れば良かったのか。どうすれば、夫とずっと一緒に生きていくことが、出来るのか。わからなくなってしまったわたしは、迷子だ。

「いちいち、ご丁寧に教えてくれるのがあなたの優しさなの？ 違うでしょう。そうやって、悪いことをしているって意識を少しでも薄めたいからよ。それは、あなたの為であって、わたしの為じゃないでしょう？ わたしもきちんと報告すれば、あとは自由なの？ それって夫婦なの？」

「そういう事じゃなくて 今は君と雛子のお兄さんの話だろう」

「何か問題があるの？ 少なくとも、わたしたちはあなたとヒナコみたいな関係じゃない。ただ、会っただけ。それだけ」

暫くの沈黙のあと、夫が吐いた溜め息は地の底にめり込んでしまいいそうなほどに深かった。この人は、全然冷静になんてなっちゃいない、自分のした事さえ客観的に見ることが出来ないのだ、と改めて思うと、なんだか悲しいような寂しいような感情が込み上げてくるけれども、それを表に出すのはなんだか嫌で、仕方ないので俯く夫のうなじをぼんやりと見つめて声を飲み込んだ。

「駄目だ。僕も君も感情的になりすぎてる。今はよそう。帰ったらちゃんと話し合おう」

「ちゃんど？」

何をちゃんと話すのだろう。問題をクリアせず、迂回してやりすごす、いつもの悪い癖。話している相手の眼を決して見ないような、近づけば離れてゆく、わたしたち。夫もわたしもきつと他人からみれば蛇行運転を続けていて、とても近い時はほんとうに一心同体だけれども、遠いときは世界中で最も遠い存在になってしまう。わたしは、その距離の縮め方を知らない。

「分かったわ。続きはまた夜　とにかく気をつけて行つてきて」

波立つ感情を抑え込んで、わたしはつとめて冷静な声を出したつもりだった。冷静なつもりなのは自分だけで、もしかしたら声は少し震えていたかもしれない。どんな声でそれを言ったのかはもう思い出せなかった。

春の夜。あの時の光景を寸分違わぬ正確さで、わたしは脳裏に描くことができる。肌寒い夜。木のテーブルを挟んで雛子と夫。どうして夫は雛子の隣だったのだろうかと思つた。わたしの隣ではなく。ちょうどガヤは週末の混んでいる時間で、わたしはそれに救われたのだった。あれが、しんとした自宅のリビングだったら耐えられずに夫が傷つくような言葉　罵詈雑言とは、いったい具体的にはどんな言葉を指すのだろうか　を力任せにぶつけていただろうと思つた。周りにはみなほろ酔いの客ばかりで、彼らは自分の話に夢中になつて大声で捲し立て、わたしたちの会話など微塵も耳に入らなかつたに違いない。そういう騒がしい場所だったからこそ、わたしは夫と雛子を詰らずに済んだ。公衆の場所だったからこそ。あるいは、テンちゃんがひどく心配してわたしたちのテーブルを窺っていることに、気づいていたからこそ。だからわたしは、強がりでも格好悪い振る舞いをせずに済んだのだ。本当は、雛子に対して嫌悪だつて出来たのに、わたしはそれを選ばなかつた。それは何故だったのだろうか。雛子が変わつていて、面白い娘だということ差し引いても余る、理由。

それはなんだったのだろうか。

その夜。

夫は待てど暮らせどついに帰宅しなかつた。一緒に暮らし始めて

五年、初めての無断外泊　というよりは家出に近い　と、朝方の白んだ空を眺めながらわたしはコーヒーを飲んだ。やけに広く感じるリビングはとても寒々しく、同じだけ静寂に満たされてそこにあった。わたしを護りつづけるシエルター。

もしかしたら、もう帰って来ないのでは、という考えが頭をかすめたが、怖くてそれを真剣に検証してみる気分にはとても、とても、とてもなれなかった。

「秋彦さんて、実は馬鹿でしょう？　リンさんじゃなくて彼がなんで家出なの？」

意味が解らない　と吐き出すように呟いて、テンちゃんは呆れたように天を仰いだ。オーマイガツ、とは言わなかったけれど、そう言わんばかりの表情なのは見れば歴然だった。

「馬鹿だと思う。ほんとうに心の底から。あの人、絶対に馬鹿よ。自分のしてる事が理解出来ないんだもの」

夫が出て行って二日目、どうにも夜を持て余したわたしはいつものようにガヤの扉を開いていた。カウンターにテーブル席が三つ。決して広くはないお店だが、此処は何時でも温かい空気に満ちていた。それが、テンちゃんの人柄によるものだ。わたしは信じて疑わない。テンちゃんをこんなふうに素敵に育てたお母さんは、いったいどんな人なのだろうと想像したけれど、それは形にならないまま

霞んで消えていってしまっ。

「っていうか、リンさんといい秋彦さんといい、なんなの、その感情を麵棒で伸ばした感じ。お互い、好き合って結婚したんじゃないの」

テンちゃんは語気も荒く言うと、飲みかけになっていたビールを一気におおってグラスを置いた。トン、と小気味良い音がして、グラスの縁に留まっていた細かな泡がガラスの壁を滑りおちて底に薄く溜まる。それをわたしは視界の端で眺め、思考がほぼ停止した頭で、夫と、雛子と、それから黒澤の顔をうすぼんやりと思い浮かべた。

夫が帰らないことを黒澤に言うべきか、散々迷った挙げ句にわたしは伝えていない。もしかしたら夫は雛子と一緒になのかもしれない。それが自然だ。むしろ、雛子以外に夫が行く場所があったは堪らない。そうそう逃げ場なんてものは、たくさんは持てはしない。黒澤に連絡をすれば、一気に解決するのか、あるいは”面倒な”泥沼が待っているのか。少なくとも、わたしが望むのは後者ではない。

自分の人生にドラマティックな出来事など起こらなくていいと、ずっとそう思っ生きてきた。少々は普通の家庭から外れるとしても、平穩で事件性なんか皆無の つまらない程になにも無い生活でよかった。ただわたしが望むものは、夫と紡ぐ平穩な生活と、多量なりとも絵に触れている、それだけだった。もしかしたら夫は、そんな生活に窒息していたのだろうか。刺激も意外性もない、そういう暮らしは夫の目には希望がないように映ったのだろうか。夫の考えていることと、わたしの考えていることの間には、大きな隔たりがあつたのだろうか。

「とにかく、ヒナコには確認したほうがいいよ？ 何処かで野垂れ死んでるよりは一緒に居たほうがマシでしょう？」

「そうだけどねえ」

「ねえ、じゃないよ。リンさんしっかりしてよ。今更ヒナコに聞けないなんて言わないでしょ？ あれだけ顔合わせておいてさ」

「それとこれとは話が別よ。実際恐いのよ、わたし。」もううちに帰らない”なんて秋彦が言い出したらどうする？」

「そんな男、こっちから放り出してやればいいじゃないのさ。あのね、世界に男は森崎秋彦しかないわけじゃないんだから。リンさんの眼が節穴みたいだからよおおおよく言うけど、世界の人口の半分くらいは男だよ。そこから僕みたいな差し引いても、お釣りが来るくらいには男の人がいるの」

まるで噛み砕いて子供を諭すように、テンちゃんは語尾に力を入れて力説した。そんな事は知っている。けれどそれ以上に、わたしの眼が節穴だというのもまた真実なのだ。まるで秋彦しか見えていないみたいに。事実、今まではそうだったのだ。黒澤尚人が現れるまでは。

「もうこの際だから黒澤兄と付き合ってみればいいじゃない」

「はい？」

「兄よ、兄。もうそれしかない」

まがりなりにもデートする間柄なんでしょう、と付け足して、テ

ンちゃんはグラスにビールを継ぎ足した。みるみる泡を被った黄金色が注がれてゆく。

「リンさんも、好きにしてみればいいのよ。それで壊れるなら結構。リンさんだけが頑張って維持される関係なんておかしい。いつだってイーブンな関係がいいって言ったのは、リンさんだよ？」

そうだ。確かにかつてのわたしはそう言った。自由でありたい、イーブンな関係でなくては、と。その言葉の奥にあったわたしの気持ちは、果たして言葉通りだったのだろうか。

自分の気持ちを言い当てる言葉を見つけることは、クッキーの中から都合のいい運命を探すようにとても困難で、わたしは気が遠くなりそうだった。

06 フォーチュン・クッキー（後書き）

作業BGM：

”Aromascape” music by RYUICHI S
akamoto

02+ 番外編 アナザー・スカイ(前書き)

番外編・黒澤尚人視点でお送りします。

『02 雨、喫茶店で』の後日談になります。

最初の印象は最悪だった。世の人妻という人妻全部が、こうでないことを俺は心から願った。

雛子 妹が付き合っているらしい相手が既婚者だったことは、とくに察しがついていた。最初は思ったものだ。あの飽きっぽい妹が、いつまでもそんな恋愛を続けられる訳がない。そもそも、何でも自分のモノにならないと気が済まないような気性で、俺はそのせいで聞き分けの良い人間に育ったわけで、そんな妹が待つ女の身分などになれるわけがない。

お兄ちゃんなんだから それが母親の常套句で、俺はそれを言われるたびに呪文のようにフリーズした。雛子は子供の頃からいつだって、周囲の皆の注目が自分にないと泣き喚くような子供だったのだ。その度に俺は思った。女って面倒臭い。だから初めは森崎秋彦の妻 凜に会うのも気が引けた。昔の雛子のように泣き喚かれたらどうしようもない。俺は、泣いている女を諫められるような高等技術は持ち合わせていないと断言出来る。隣の家の子供等 日舞の家元の息子で、幼少の頃から女にだらしない俺の幼馴染 じゃあるまいし。いつか刺されるぞと俺は忠告したい。

はじめは妹が飽きるまで放置しようと思ったのだ。けれど、そうも言ってもらえない事態に我が家は突入したわけで。

『最近、雛子の顔を見てないな。あれは何してる。毎晩遊びに出かけてるのか』

ある日の夕食の、親父の一言が始まりだった。

俺たちの父親　黒澤和磨　は昔気質の職人で、非常に厳格な人間でもある。昔からしつけに厳しく、いつだって強面で仕事場には一切入れてもらえず、かといって育児を手伝うような人ではなかったから、俺はこの年齢になってもまだ、親父と腹を割って話した記憶がない。無論、妹だつてそつだ。親父はずつとずっと遠くの生き物で、恐れ多い神様のようにな家の中に君臨している。この時代に質実剛健、亭主関白なんて流行らない。

そんな具合であるから、父は自分の娘が既婚者と付き合っているなどという事実を全く知らず、万が一にもそれが父の耳に入ることがあれば、妹は勘当どころか我が家の存続の危機である。事實は明るみになる前に葬り去らなければならない。お前の育て方が悪いからだ、と母親に矛先が向くの俺はもつとも恐れた。妹がしでかしたことは母の責任ではない。もつと言えば、妹があんなに我儘になったのも母が甘やかしたからではない。箱入り娘と周りが甘やかした結果に他ならない。その証拠に、同じく育てられた俺は至って普通だ。少なくとも傍若無人ではないし我儘でもない、はず。

考えに考え抜いた妹思いの兄は、決心した。

どうにかしてあのワガママ娘を沈静化させなければならぬ。親父が気づく、前に。

「謝ってくださいなんて言っていないでしょう？」

後日、森崎凜に会った俺の算段はもろくも崩れ去った。初めて来る喫茶店で、俺はだしぬけに森崎凜にそう叱られた。当人は叱った

つもりは無いのかもしれないが、俺には十分、険のある言葉に聞こえたのだった。

「わたしがこう言うのもなんだけど、わたしは相談相手に向いてないと思うの」

じゃあ、俺の苦勞はどうすればいいんだ。とは云えなかった。

森崎凜という人は、とても冷静で興味深かった。自分の夫が他の女と関係していても、それについて取り乱す様子もない。普通こういうときに、女ってのは感情的になるもんじゃないのか。予想外の彼女の反応に、話そうと考えてきた内容は一気に吹っ飛んだ。本当にやりづらいことこの上ない。母親も妹もこういうタイプではないし、友人にも居ない。こんな変わった女が何人もいたらそれはそれで堪らない。のだった。

「っーか意味わかんねんだけどまじで」

思わず声を荒げると、薄い冊子に目を落としていた祐希。片岡祐希、うちのお隣に住む幼馴染で、生まれて以来友人のひとり。が眉間に皺を寄せたまま顔を上げ、数秒間俺を見つめたあと、何も無かったように視線を冊子に戻した。

「無視すんなよー」

「だって何べん繰り返すの雛子の話。夜中におれんち来てまで愚痴らないで、雛子に直接言えばいいのに。このシスコン」

「シスコンじゃねえよ。雛子みたいな女は無理。到底無理」

「異常な嫌悪も執着のしるし。立派なシスコンですよ」

おどけた口調で言い返す祐希は本当に憎たらしい。

「お前はいいよ。あの年上の彼女と上手くいつてるんだろ？ ヒナコじゃなくて、何だっけ」

「ミナコ。そこ間違えないでよ、もう」

来るもの拒まず去るもの追わずのはずだった祐希はいつの間にか彼女が出来ていて、今までの愚行が嘘のよう。祐希が言いなりなんてどんな美女だよ　と興味津々だったが実際は大人しい地味な女で、正直いって拍子抜けした。しかも六つも上で遠距離で、休みごとにいそいそと新幹線に乗る祐希ははつきり言って　気持ち悪い。

「ヒナコも往生際悪いつていうかね。妻子モチとか止めとけて話だよ。どうせあと何年かしたら親父さんの弟子の誰かと結婚するわけでしょ？　ああ、だから逆に今のうちにいろいろやっておく気なのかな」

「結婚？　誰が？」

「ヒナコ」

「俺聞いてないけど」

「だってさ、お前は親父さんの跡は継がないんでしょ？　普通に学芸員やって古代文字とか研究しちゃってるわけでしょ？　そしたらもうヒナコが婿取りなわけじゃん。親父さん、お弟子さん何人居るか知ってんの？」

そうなのだ。親父の親父　俺たちの祖父　は人間国宝で、黒澤家は代々、能面を作る仕事を生業にしている。何の因果か隣の片岡家　祐希の家　は日舞を生業としていて、祐希はもうすぐおじさんの跡を継ぐ。純粹培養で踊ることしか知らない祐希が、他の道を選ぶはずがない。(それでもいつちよまえに反発した時期はあって、そのせいで祐希は何でか医大の歯学部に通ったことがあった。)

「、知ってるよ。お前、なんでうちの事情にそんな詳しいの？俺しゃべった覚えないけど」

「小母さんがおれを見つけちゃ喋ってくるからねえ。雛子も尚人も何考えてるんだか分からない、祐ちゃんはお父さん孝行で偉いわねえ、って」

「なにがお父さん孝行だ。さんざっぱら生徒さん食い散らかして。この女誑しめ」

「おれは改心したの。お前がおれに言ったことだろ」

神妙な顔つきの祐希を見ながら、なんのことかと俺は逡巡する。

「前に　ミナコさんの行方が分からない時、お前言ったよ？　『ちゃんと、向き合え。じゃなきゃ、本当に必要なものまで失くす』ってさ。だからおれ、何が大事かよく考えたの。このちょっとしか入ってない脳みそで」

「で？　答えは出たわけ」

「とりあえずはね。尚人は欲張りだって言うかもしれないけど、お

れ、どつちも大事なの。踊りも、彼女も。だから、ちゃらんぼらんは止めた。これからも多分踊るし、これからずっと彼女と生きるの」

そう言った祐希の顔はいつになく真剣で、俺は驚く。こいつはこんな男だったろうか。変わったのだとしたら、あの自堕落な祐希を変える女っていったいどんな人間か、俄然興味がわいてくる。

「どんないい女なんだよ”ミナコ”は」

「すげーいい女」

のろけさせる機会を与えてしまったことに後悔する。家族に限りなく近い人間の恋愛など、聞いていて胸やけがしそうだ。俺はそれでも、祐希を茶化すようなことは言えなかった。真剣に話す人間に、それを出来るほど俺は馬鹿じゃない。

「そういう尚人はまだ彼女いない歴更新してんの？ オマエの職場は女がいないわけ？」

「学芸員なんてほとんど男で変人。研究してる奴なんて尚更でしょ。たまにいる女は物すごく年上の女史だったりするわけよ。どう出会えと？」

「そりやお気の毒さま。でも、こないだ、雛子の不倫相手の奥さんと会ったのかなんとか言ってなかったっけ」

「それは全然出会いじゃない。人妻だろ」

「そうだけど。どうだったの？ 相手、どんな人だったの」

「変な女。俺には太刀打ち出来なさそうな変な女。大事なので二回言いました」

その瞬間、俺は苦虫を噛み潰すような顔になっていたに違いない。祐希はそれを、あきれたような表情で見つめてくる。いつもとは立場が逆転しているような気がしないでもない。

「変って言われてもさあ。どう変なの。顔が変なの、性格が変なの」

俺はこいつと違って、口が裂けても顔が変だなんてコメントは差し控える。どんだけ上から目線なんだ、顔が変て。なまじ整った顔の主が言うものだから尚更たちが悪い。

「だからさ、前に言っただろ。不倫相手の嫁になぜか雛子が容認されてるって話」

「ああ、あったねえ。それは無いよね、普通ならね」

「それがあつたんだよ。静観してろって叱られた。あと、謝られても困るし自分は相談に向いてないから止めた方がいいとか何とか」

そりゃ変わってる、と祐希は呟いて、足元に置いたままだったペットボトルに手を伸ばした。三ツ矢サイダー。こいつは子供の時分から食い物の趣味が成長しない。炭酸飲料を飲みすぎて、歯が溶けるぞと脅されていた小学生の頃を思い出す。

「その人の言う事も正しいよね。本人が自覚しなきゃどうにもならないんだしさ。雛子、説教して聞くようなタイプじゃないでしょ」

「確かに。でも、あれは俺の中の”ヒトヅマ”のイメージを完全に

破壊したね。変人もいいとこ。あんなに飄々としていられるもんかね」

「お前さあ…自分も相当に変だつてこと自覚してる？ 自分も、研究ばつかしてる変人の学芸員”にカウントされてるんだよ？」

「それは知らなかった」

俺は至って普通に生まれ、至って普通に生きてきた。少々変わったいたのは父親の生業だけで、それ以外は皆と同じなんだと

俺は最近まで思いこんでいた。母親もどこにでもいるようなステレオタイプの”母ちゃん”で、妹も然り。我儘なのは両親が、特に父親が甘やかしたからに他ならない。

「本人が何を思ってるかなんてさ、周りの人間は勝手に情報を解釈して受け取るけど、それっておれたちの勝手な思い込みなんだから」

「いやに味方するねえ。お前、人妻好きだっけ」

高校生の頃、こいつは人妻と付き合っていたのだ。本人のほかを知っているのは俺だけだ。あんな修羅場、他の誰に話せようか。別れる時にはなぜか俺が相手を宥め、締めくくりには引つかかれた。俺は雛子や祐希の後始末ばかり。運命の誰かと出会っ暇さえないと祐希のせいにするのは怠慢だろうか。

「それほじくり返さないでよ。今は真面目なんだから」

本当に本当に改心したらしい祐希の横顔はやけに澄み切っていて、俺は寂しいような悲しいような気分になる。もう祐希は、修羅場になつたって俺に泣きついたりしないだろう。雛子はどうか。あの常

識が通じない娘は、妻が待つ家に帰ってゆく自分の思い人の背中を、
どんな気分で眺めているのだろうか。

02+ 番外編 アナザー・スカイ(後書き)

作業BGM:

”Lust” music by Rei Harakami)
from”Lust”)

夫が帰らないと白状したときの黒澤の反応は凄いもので、あなたの夫じゃないでしょう、と思わずたしなめたくなる程だった。黒澤の話では、どうやら雛子は普通に自宅で生活しているらしい。では、夫は何処にいるのだろうかとわたしは俄かに不安になった。

「案外、近くのビジネスホテルなんかにいたりして」

まったく世話の焼ける人だ、と言わんばかりの黒澤の表情に、わたしは申し訳ない気持ちでいっぱいになる。自分よりもだいたい年若い青年にまで心配されて、夫は一体なにを考えているのだろうか。

「普通に会社には行ってるんでしょう」

「そうみたい。無断欠勤だったら家に電話が来るでしょう？」

「有給なんかを使って何処かに行ってしまったら？」

ストローを噛みながら、意地悪な声で黒澤は訊ねてくる。それもまた有り得る話で、わたしは南国のビーチで昼寝する夫を何故だか思い浮かべた。海なんて、二人で行ったことはないのに。それ以前に夫はカナヅチなのだ。

「何処かで自殺なんてしてくれなければそれでいいわ」

黒澤が小さく溜め息を洩らす。

「凜さんは優しすぎますよ」

咎めるような、射抜くような視線に心拍数が上がる。

「同じことを言われたわ」

「誰に？」

近所の居酒屋の子と答えると、途端に黒澤の眉根が寄る。そんなにプライベートな事まで話すんですか、とご機嫌は斜めだ。気に障るような発言をした憶えのないわたしは、余計に混乱する。

夫といい黒澤といい、そして雛子といい、わたしの周りは解りやすい人間が皆無らしい。それとも、わたしが単に鈍感で愚かなだけなのだろうか。氷が溶けて、とうに薄まってしまったコーヒを眺

めながら、わたしは小さく溜め息をつく。こうして夫の身を案じながら、黒澤と会うことはわたしの生活に、気持ちに小さく波を立てる。

黒澤は、こうして時折会うことについて何と感じているのだろうか。本当ならば、何の接点もなく、わたしたちは知り合はずがなかった。もしも、夫と雛子が恋に落ちなかつたらば。

「…雛子と夫って、なんで知り合ったのかしら。そもそも」
「凜さん？」

話の矛先がずれていくのを理解しながらも、わたしの興味はその一点に向かう。昔から変えられない、悪い悪い癖。

「出版社の営業の冴えない三十男が、なんで若くて綺麗な娘と知り合うの？ もしかして夫は何か悪い事でもしてかしてるのかしら」

たとえば、女の子と過ごす一晚をお金で買い、その相手がたまたま雛子だったとしたら　さすがにそれは雛子を冒瀆しているとは思えず、わたしは押し黙る。しかし夫と雛子の接点は、常識で考えれば考えるほどに無かった。生まれた環境も、生きるテリトリーも世代も違う。夫は、何処で雛子を見つけたのだろう。何百万人もいる、人の群れの中から。まるで砂の中から米粒のようなダイヤを探すような所業だ。

「　たぶんきつと、それは俺のせいなんです」

黒澤は綺麗な顔を憂鬱に翳らせて、まるで人形のように長い睫のついた目を伏せた。

x x x x x

黒澤の云う”夫と雛子の馴れ初め”話はあまりにドラマティック過ぎて、わたしにはかくも信じがたい話だった。

発端は、父親　話に何度も登場する、人間国宝の父親　に、夫の会社の編集者が取材に行ったことなのだという。父親はその編集者をいたく気に入り、その編集者は何度か取材に訪れ懇意になっ

た。世話になつたから　なのかなんなのか、彼は家事手伝いの娘に菓子折りを持たせて出版社にご挨拶に行かせた。それがひいては夫に一目ぼれするきっかけになつた、と黒澤は説明する。

それがなんで、”俺のせい”になるのかは良く解らないが。

「俺がいれば、きつとその役目は俺に回つてきたはずなんだ。だって、本当ならそんなこと、妹に言いつけるはずがないんだ。家から出したくなくて就職だってさせない人が」

「そんなに？」

わたしからすれば、到底理解できない話だ。そんなふう束縛されたら、人は誰だつて逃げたくなる。雛子がヒステリックになつてしまうのも頷ける気がする。

夫もさることながら、雛子の顔も、もう何日も見ていない。夫が家にいたときには、それこそ定期的に襲来していたあの怪物がいない。そのことは、わたしを少しさみしくさせる。安堵よりも寂しいだなんて、わたしはどうかしている。

「来週、妹と話し合います。本当に森崎さんの居場所、知らないのかどうかも確かめておきたいから。そのことと」

「…？　まだ、なにかあるの」

何気なく聞いたその一言に、黒澤は微かに頬を染める。色が透き通るように白いから、尚更にそれが顕著にあらわれた。黒澤は一字一句間違えないように練習してきたと云わんばかりの勢いで、わたしの眼を見据えて呟いた。

「俺、凜さんのことが好きです。付き合つてほしい。」　ふり”　なんかじゃなくて」

「…え？」

耳がなんとなく、聞こえるのを拒否したがる。それくらい、わたしには信じがたい。先刻の夫と雛子のエピソードなんか吹っ飛んでしまつくらいには。

「もう一回言わせたいんですか」

「ちが」

「何回だって言いますよ。俺は凜さんの恋人になりたい。ふりのデートはもうしたくない。俺はあなたが欲しい」

あんまりにも直截な言い草に、わたしのほうが恥ずかしくなる。この子は何を言っているのか、自分で理解しているのだろうか？

よりにもよって、妹の不倫相手の妻に？

酔狂で云っているのだとしたら、この子は相当にはかかもしい。夫なんかよりも遙かに。

「相手は他にいくらでもいるでしょう！？　なんでわたしなの」

なにも、話をややこしくしなくてもいい。普通の、他の誰かにしてくれば、これ以上話をこじらせなくてすむ。

「でも、あなたがいいんだ」

強い意思を滲ませた淡い瞳さぞ綺麗だろうと思ったが、わたしはその時それを真っ直ぐに見つめ返す勇氣はとてもじゃないけれど、持てなかった。

x x x x x x

「…で、それで？」

事も無げにテンちゃんは話の先をうながし、深いルビー色に輝く紅茶を音も無く差し出す。わたしはどう見ても困り果てている状態に違いなく、どうしてよいものかも分からず、いつもの通りガヤに駆け込んだところだった。

「…もつと驚いてよ。わたしはすごく驚いてるんだから」

不満を洩らすと、テンちゃんは得意そうな表情に含み笑いを浮かべる。何でもお見通しだ、と言わんばかりのテンちゃんに、わたしは少し面白くない。わたしのほうが、幾らか年上なのに。

「リンさんより、僕のほうがいろいろと経験豊富なわけ。辛

酸舐めると言い換えてもいいけど」

「それじゃあわたし、世間知らずみたいじゃないの」

「まあそこまでは云わないけど」

冷房の効いた昼間のガヤは、通りの喧騒からも隔離されたシエルターのようにひっそりとしている。微かなポリウムで掛かる音楽は、今日はブラームス。悲劇的な気分になってしまいたい、自棄っぱちのわたしの気分にはピッタリだ。

「…相変わらず旦那さんは行方不明なわけ？」

「行方不明じゃないわよ。どこにいるか解らなかつただけ。でもね、ようやく居所が分かつたの」

「嘘」

ことさらオーバーな態度で驚いてみせるテンちゃんは、不愉快な表情を隠そうともしない。今回の一件で、どうやら夫はテンちゃんにとても、幻滅されたようだ。なんだか可哀相だけれど、当然だとも思う自分もいて、わたしは自分の感情を持て余してしまう。

非常識と、変わっていることの区別は何処ですか 以前、ガヤで飲んでいるときに話題に上がったことがあった。変わっているのは許せるけれど、非常識な人は絶対に店に入れたくない、とテンちゃんは言った。その区別で言えば、店に入る事の出来る雛子は”変わっている”の範疇で留まっているらしい。わたしにとっては非常識極まりないことが過去に幾つかあり、だから雛子は非常識な箱入り娘 ということになっていたのだが。彼の中では少々違うらしい。

「…で、どこにいたの？」

「 実家」

「え？ 結構ベタな展開よね。っていうかリンさん、実家は探さなかつたの？」

眼を丸くして、テンちゃんは湯気の立つカップに口をつける。

「夫の両親に、なんていうの？ 浮気して揉めた拳句に家出しまし

た、そちらにお邪魔してませんか？　って？　嫌よそんなの。そんなことしたくないわ」

「たしかにそれはかっこ悪い」

冷房の効いた店の中は鳥肌が立つくらいにひんやりとしている。

それを慮って温かい紅茶が出てきたのだろうが、冷え性の身体には少々寒い。テンちゃんはいつもと同じようにTシャツ姿で平気そうにしている。むしろ暑そうだ。梅雨が明けてからこっちは
記 録
的な猛暑が続いていて、ガヤは文字通りオアシスだ。

「とにかく一度、腹割って話してみたほうがいいと思うよ？　リンさん、言いたいことの十分の一も言っていないと思うけど？　別れるならそれはそれでいいじゃない。こんな状態をずっと続けてくよりマシだよ。好きだって云ってくれる若い男もいるわけだし」

「それ、ヒナコのお兄さんのこと？」

「そうだよ。他に誰がいるの。百歩譲って僕ってことにしてもいいけど、僕のは隣人愛だから」

「なにそれ」

自信に満ち満ちた顔でテンちゃんは答える。

「まあ、僕はリンさんの味方だつてことだよ」

テンちゃんがもしも、女の子を恋愛の対象として見る男の子だったとしたら、わたしはテンちゃんに恋をしただろうかと考える。秋彦と知り合った時のことがどうだったかなんて、遙か遠い昔の出来事で思い出せなかったからだ。代わりにテンちゃんのifを想像して、代替の行為にしようあたりが怠惰すぎると自分でも思う。

知り合ったころの秋彦はやっぱりおくてで、無口で、穏やかだったが良く解らないのは今とあまり変わらなかった気がする。いざ会えばあんまり喋らない癖に、頻繁に食事だの映画だのと誘ってくるので、痺れを切らしたわたしが交際を申し込んだのだった。思えば、秋彦は最初から、心底わたしが好きというわけではなかったのかも。友情に似た愛情はあったと思いたいが。

「…で、選んだのがヒナコってわけなのかしら」

「宙を見つめたままの独り言は恐すぎるからやめて。」何かいる
みたいじゃない」

テンちゃんは大仰に寒がるふりをして見せ、本当に冷房強すぎる
かも　とのたまいながらカウンターを出て行った。この店の冷
房は昭和の香りにまみれた木目調のクーラーで、本体のダイアルで
しか調節できない（！）シロモノだ。テンちゃんの母親の代から現
役だというから、物持ちがいいのか持ち主の徳がよつぽど高いのか。
テンちゃんに言わせれば後者なのだろう。

「とにかく、このまんまつてのは良くないと思うよ？　ちゃんと3
人？4人？まあどつちでも構わないけど、とにかく話し合わないと。
なんなら、定休日に此処貸してあげてもいいからさ。さすがにヒナ
コを家に上げるのは気分悪いでしょ？」

店の隅からテンちゃんの声だけが飛んでくる。そう、このままは
良くない。それは知っている。けれども、何かしらの決着をつける
ことが容易でない　とにかく膨大なエネルギーを要する
ように思えるわたしには、とてもじゃないが気の進む話ではない。

「このまんま、旦那さんと別居生活に突入するわけ？　離婚もせず
に？　兄のことはどうするのよ。ヒナコだってこのままつてのは納
得いかないんじゃないの　」

「ちよ、ちよつと、ストップ。待ってよ。そんなに一気に言われた
つて処理できないわ。自分のことで精一杯なのよ」

慌てて遮ると、テンちゃんは見ただこともないような真顔で諭すよ
うに云った。

「だから、彼らの分は彼らに考えさせればいいのよ。そんなのリン
さんの仕事じゃないんだからさ」

07 スクエア・ロンド(後書き)

作業BGM"GAME"GAME"music by perfume)
rom"GAME")

わたしには最大の難関に思えた日曜日を無事に乗り越えられたのは、他でもなくテンちゃんの活躍によるところが大きい。いつにも増して無気力の塊 何でも他人事のように傍観し、片付ける癖は、こういうときには最も邪魔なものなかもれない。

遠くの木々からの、蝉の音が煩いくらいに聞こえてくる。わたしはダイニングテーブルに頬杖をついて、昨日の光景を思い浮かべた。わたしの隣に夫 秋彦 、向かいには雛子と黒澤。黒澤と夫はこれが初対面のはずで、お互いがお互いに遠慮がちな視線を走らせているのが見てとれる。

テンちゃんの計らいで定休日の札が下げられた店の中は快適な温度に保たれていて、わたしの心の乱れを誰にも悟られずに済むような気がした。わたしは斜め向かいの雛子の前髪 相変わらずまつすぐに切り揃えられている黒いそれ の正確さに感心しながら、居心地の悪そうな黒澤を視界の端で受け止めた。ついでに、非常に興味ありげにこちらを窺う、キッチンの奥のテンちゃんの視線も感じ取りながら。

「すみません、俺から、ちょっといいですか」

嫌な静寂を最初に破ったのは黒澤で、当事者ではない（こともないのだが）彼が居てくれることに少なからず安堵する。わたしと夫と雛子では、お話にならない事はおおかた予想がついていたのだ。傍観者と臆病者と、ヒステリックな娘では。

「まずは、妹のことについてご面倒をお掛けして、本当に申し訳ありません。特に 凜さんについては」

真摯にそう詫げる黒澤はいつにも増して大人びて見える。長男（あるいは兄と呼ばれるひと）だということと、少なからず関係があるのだろう。黒澤はきちんとした口調で丁寧に、まずはわたしに、次に夫に頭を下げた。

「まあ、それについては夫も悪い訳だから」

早くもこの空気からリタイヤしたくなってきたわたしが思わず言う、黒澤は眉根を寄せてわたしを見つめてくる。

「どうせ、森崎さんは妹のワガママに付き合わされているだけなんでしょう？ こいつに振り回される必要なんかありませんよ」

雛子は不満をありありと顔に浮かべながら、それでも押し黙ってずっと夫の方を向いている。いつもの雛子の剣幕は何処にいつてしまったのだろう。さすがに家族の前では、ばつが悪いのかもしれない。

「ヒナコのワガママに僕が付き合わされてるだつて？ そんな事はないよ」

夫はいつになくはつきりした物言いで、わたしは隣の夫をまじまじと見つめた。別人　とまでは言わないけれど、優柔不断が得意の、いつもの歯切れの悪さが無い。雛子は雛子で、そんな様子の夫を潤んだ眼で見遣っていて、わたしは自分が部外者なのではないかと錯覚しそうになる。夫は、本当に自分で雛子を望んだのではないかという気がしてきた。確かに夫は押しに弱いし、優柔不断ではある。しかしそれ以上に、頑固者だということをわたしは今更思ひ出す。

「逆かもしれない。僕の我儘に、彼女が付き合ってくれているんだ」
黒澤は驚いたような落胆したような、一言では形容し難い表情を見せた後、言葉を確かめるようにして夫に質問を投げ返した。

「妹を、ちゃんと好きだつて、ことですか」
「ああ」

その返事を聞いた瞬間、自分の身体の温度がどつと冷めるのが分かった。夫の気持ちをはつきり聞くまでは、ヒナコに振り回されているだけの夫の情けない姿を、半分の確率で期待していたのだ。僕はどうにも逃れたいけど、ヒナコの剣幕には逆らえない　とでも云って、夫がわたしのところに戻ってくるのを。

ああ、ちゃんと好きだったのだ。

口や態度には殆ど出したことがなかったけれど、でも、わたしは、確かに森崎秋彦を好きだったのだ。今こうして、途方もないダメージを受けるくらいには。

半年以上も前に受けておくべきだったダメージが、今ごろになってようやくわりと効いて来たのが自分でも理解できた。タイムラグが生み出した利子も加算されて。その場所で、わたしは完全に部外者だった。

「あなたたちのことは後で話し合っつて。今日はわたしの話をちよつと聞いてもらいたいの」

聞いてくれる？ と、夫にはなく雛子に問いかけると、いつもなら反論してくるはずの彼女は神妙な顔で肯いた。手付かずのアイスティのグラスには、沢山の細かい水滴がついている。それらは重力に負けて大きな一滴になり、ゆっくりとグラスの外側を滑っていく。雪ダルマ式。小さな水滴でさえ、集まればやがては墜落するのだ。それはもう、抗いようのない自然の摂理。だとしたら、わたしは一体何に、抗おうとしているのか。

「凜さん？」

俯いたままのわたしを案じるように、黒澤の柔らかい声が降り注いでくる。そうだ、こんなに優しいひとを、そして優しくてずるい夫を、我儘だけれどひたむきな雛子を、そして、あらゆることから逃げて、ますます難解な迷路に入っていく自分を、解放してやらなければ。

「あのね、わたし、離婚したいと思っつてるの」

それは、あの日雛子を愛していると云つた夫の決意に満ち満ちた顔に、似ていたかもしれない。

x x x x x x x

「…本気で言っつてるのか」

低い声音で沈黙を破つたのは、夫だった。困惑したような、しか

しはつきりと憤った色を纏わせて、夫はわたしの顔を見つめてくる。信じられない。　　とでも言うように。

「本気よ。今更そんな嘘をついて、どうするの」
また、沈黙。

「あなたはヒナコと一緒にになれるじゃないの」

「君こそ、今更そんなことを言い出すのか。僕へのあてつけか？」

皮肉のつもりは毛頭なかったが、夫の耳にはそういう風に聞こえたらしい。この解らず屋　　と詰りたい衝動を必死に収めようとわたしは押し黙る。今、口を開いたら。

「あの日君は、僕に言っただろう？」　　あなたたちのことはあなたたちが決めればいい。でも、ちゃんとわたしのところに帰ってきて夫としての役目はちゃんと果たして”って。どうしてあの時、僕を責めなかった？　　どうしてあの時、別れるって言わなかった？　　どうして今になって、そんなことを言い出すんだ？」

夫の言い分はもっともだとわたしも思う。あの時、別れてしまえば良かったのだ。変に物分りのいいふりをして、それで。夫には執着しない自分を殊更に演出して。そんなもので、わたしは何を護りたかったのだろう。何が、欲しかったのだろう。

「…あの時とは、もう違うの。わたしもあなたも、変わったの。事情も、状況もね。現にあなたとわたしは、一緒に生活していない。わたしたち、選択を間違えたのよ。あの時、わたしはちゃんと怒ればよかった。あなたを好きだって、ヒナコに渡したくないって、そう言えばよかったの」

「ごめんね、と誰に言うでもなく独りごちると、夫は痛々しいほどに真剣な顔つきで、首を左右に振った。それこそ、ブンブンと音がするくらい。黒澤は重たい空気に気圧されているのかいないのか分からない眼つきで　　遠くの景色を眺めるように　　わたしと、夫と、雛子の三人を代わる代わるに、見ていた。

「書類は、後で書くべきものを書いて持ってきて。郵送でもかまわ

ないわ。家は買い手を探すけれど良いわよね？」

夫は一瞬、何のことだか分からないといった表情を浮かべたが、すぐさま険しい顔になって渋々分かった、と小さく答えた。雛子は見た事もないような不安げな顔でわたしと、夫の両方に視線を向け、何か言いたそうな素振りをしながらも口を開かなかった。

「凜さん、そういう細かいことは後でも」

「だめよ。こういう人はね、結局後でごねるの。別れたくないとかやり直そうとか。今、全部決めてしまわないさいよ」

見かねた黒澤が口に出すと、今までカウンターの上で足早に近づいてきて捲くし立てた。突然乱入してきた彼に、黒澤は遠慮なく不快な表情をして見せる。

「部外者は口を挟まないでいただけますか」

「あなただつて部外者でしょう。当事者じゃないんだから。リンさんのしたいようにさせてやりなさいよ。ついでに、あなたの妹さんにも現実つてやつを見せてあげた方がいい。別れるつて簡単には済まないの。やりたくも無い億劫な手順を踏んで、そのたびに傷つきながら進むの。自分が壊したものが何なのか、ちゃんと見せておくべきだと思っわ」

この手の言い合いでテンちゃんに勝てる人を、わたしは知らない。しかも、線の細い黒澤と体育会系のテンちゃんのやりあいは、ちぐはぐな感じがして可笑しいのだ。頼もしい騎兵隊につい微笑みながら、わたしはテンちゃんにお願いをした。

「黒澤くんをカウンターに案内してあげて。何か美味しいお酒を。それから、話が終わったら飲みましょう、皆で」

この期に及んで、また仕方のない提案だと、思われるだろうか。その証拠に、夫と雛子と黒澤が、一様に眉間に皺が寄っている。それでも、ここにいる全員が敵だとは、到底思えなかった。口角を上げてにっこりと笑っているのはテンちゃんだけで、わたしは彼の人懐こい笑顔につられて、漸く笑うことが出来たのだった。

08 no good is no bad (後書き)

作業BGM：サカナクション「ネイティブダンサー」

09 筋肉と宿酔の相関性（前書き）

久しぶりの更新ですみません。
しかも短いです。

凜が想定外の振る舞いをして、予定が狂ったなァ……。 （ぼやき）

09 筋肉と宿酔の相関性

空気のようだという形容詞は、いったい褒め言葉なのか、そうでなかったのか。

それでもわたしたちは長い間一緒にいたのだし、その時間が積み上げてきた何かが、確かにあるのだと思い込んでいた。

事実、ある一面では確かに積み上げてきたのかもしれない。しかし、その一方で互いの間にある溝を埋める作業もまた、おざなりにされたままでテーブルの傍らにずっと、存在していたのかもしれない。

× × × × × × × × × ×

頭痛で眼が覚めた。海の底に沈んでいた意識がじりじりと浮上し、水面近くまでやって来ると、そこで漸く、わたしは外界に朝陽が差していることに気が付く。皮膚が不快に張り付いているのは、何故だ。説明しがたい気分が悪さは。

回らない頭でそこまで考え、唐突に吐き気を自覚したわたしは、周囲を確かめることもせずトイレへ走った。起きぬけの手足は思うように動いてはくれなかったが、悠長に彼らが起きだすのを待っている余裕はなかった。とにかくもう、胃の中のを吐き出してしまいたかったから。

昨日磨き上げた行為を全部無駄にするように、わたしは胃のものといても、固形物はろくに入っておらず、ほとんどがアルコールを吐き出すと、鳩尾あたりの筋肉がひくひくと痙攣した。ああ、昨日の記憶が、途中で途切れている。ばかなわたし。

昨夜の話し合いのあとの記憶は途中でおぼろげになり、あやふやになって、最後はアルコールに溶かされて飲み干されてしまったのだろう。何から何まで覚えがない。今いるのは確かに

我が家のトイレらしいが、わたしは一体どうやって帰りついたのだろう。夫なら此処の鍵をまだ持っているし、もしかしたら昨夜はずっと一緒だったのかもしれない。そういえば、寝ていたベッドに自分以外の気配があったようにも思う。勘違いでなければ、きっとあれは夫に違いない。

「…とんだ醜態」

洗面台で吐瀉物を流すついでに、顔を洗う。落とすそこねた化粧が、澱のように溜まって気持ち悪いことこの上ない。鏡を見れば、眼の下はパンダよりも酷いありさまだ。あわててメイク落としを掴む。

適当に髪を纏めて寝室に戻り、ベッドの端に築かれている毛布の山を剥がして夫を起こした。

はず、だったのだが。

「!？」

そこで寝息を立てていたのはあるうことが、テンちゃんそのひとだった。

「その様子だと、昨夜も盛大に吐いたのなんて覚えてないよね？」
ダイニングテーブルに腰掛けたテンちゃんが、呆れた表情でわたしに尋ねてくる。吐いたのどこるか昨日のある時点からぶつり途絶えている記憶について、補うべきところを補おうとして口を開きかけた。

「教えな―い。詳しいことは黒澤くんに聞くべきだよ。リンさん、ものすごく迷惑かけてたんだから」

そこまで言われると気になって仕方ない。わたしは一体、なにをしでかしてしまったのだろうか。

「恐くてとてもじゃないけど訊けないわ」

そう？ と片眉を上げて、テンちゃんは手際よく林檎を切り分けられている。いつの間にか台所はテンちゃんの牙城だ。

「黒澤くんに言わせるのは、確かに酷かもね。見た目どおり繊細だとは思えないけど、さすがに昨日のはねえ……。ああ、リンさん、ミキサーどこ？ スムージー作ってあげる。完全に宿酔って顔してるから」

けらけらと笑うテンちゃんは元気だ。昨夜はさほど飲まなかったのだろうか。

「テンちゃんは飲まなかったの？」

「飲んだよ。かなり」

その割には元気だ。筋肉のお陰なのか、とわたしは馬鹿馬鹿しい思いつきを口にする。

「飲めども飲めども、全然酔わないんだよね。なぜか。ホルムアルデヒドの分泌が素晴らしくいいのかも」

「そういうものなの？」

「筋肉のおかげ、っていう仮説よりはマトモだけど」

朝から林檎を素手で潰してしまいそうな勢いだ。わたしはこみ上げてくる微かな嘔吐感に顔をしかめたまま、放り出したままの携帯を手にとった。開いてみれば案の定携帯は電源が切れたままで、わたしはアダプタを挿して電源ボタンを押す。留守電に罵詈雑言でも入っていたらどうしよう、などとは思わず。

「昨日、ヒナコは旦那さんが送っていったの。で、最後に店に残ったのは僕とリンさんとヒナコの兄でさ、そこからリンさん飲むわ酔うわ吐くわ」

吐くわ？

「もしかして、わたし皆の前でリバーす……」

「かろうじて僕の前では吐いてない。けど、ヒナコの兄がリンさんのこと介抱してたから、兄は目撃しちゃったかもね」

一瞬にして後悔の嵐が吹き荒れる。この仕打ちはなんだろう。いや、自業自得なのは理解している。しかし、よりにもよって、自分を好いてくれている(らしい)男性の前で醜態を晒すというのは、

如何なものなのか。他の男性だとしても、それはやっぱり嫌だけれど。

「多大なご迷惑って、そのこと…?」

恐る恐る訊ねるが、テンちゃんは首をすくめて見せただけだった。自分が何をしでかしたのか見当がつかないというのは恐ろしい、ほんとうに。

切れ切れに残った記憶

あるいは残像の欠片

を?ぎ合

わせてみても、自分の行動も、言動も、まったく思い出せない。こんな事は初めてだった。そんなにもわたしは、参っているのか。アルコールに飲まれるほどに。

微かに覚えているのは、背中や肩に感じた大きな手のひらの感触だけで、テンちゃんの話と照らし合わせてみればなるほど、それは黒澤の介抱する手だったのだろう。わたしは三十にもなって、何をやっているのか。

「まあ、人生の一大事だし? 飲まなきゃやってらんないシチュエーションではあるし? お酒のしでかしたことは全部忘れちゃえ?」

「…忘れるどころか全然思い出せないんだけど?」

「そうだった」

テンちゃんは再び首をすくめて見せ、わたしはさらに深いため息をつくことしか出来なかった。

「とにかく、ヒナコの兄には連絡しなさいよ?」

母親のような顔でわたしに言い含めるテンちゃんに反論出来るはずもなく、せめて宿酔がもう少し治まってから、という期限をもぎとることしか、その時のわたしには出来なかった。

09 筋肉と宿酔の相関性(後書き)

そして、テンちゃんの出番が最初の予定より大幅に多いなア…

作業用BGM”Intersection”music by Kristina & Laura)from”INTERSECTION”)

10 メビウスの色

記憶の喪失からひと月以上経って、ようやくわたしは黒澤に連絡をした。それまでの間に何をしていたの、とテンちゃんに叱られてしまいそうだったが、とてもじゃないがそんな気分にはなれなかったのだ。市役所に離婚届を貰いに行ったり（書き損じを恐れて予備を五枚も貰ったりした）、両親に事の顛末を説明したり、荷物の処分に困って業者を呼んでみたり、そういうことで一か月はあつという間に過ぎていった。

夫との思い出が残るこの家に住み続けるつもりは毛頭なかったから、テンちゃんを呼んで引越しの準備に没頭したりした。作業と仕事は、心の平穩に役立つ。仕事から帰れば食事も摂らずに、荷物の整理を繰り返す。その行為は安らぎでさえあつた。その間、わたしは微塵も黒澤のことを思い出さなかつた。否、思い出さなかつたわけじゃない。思い出しはしたが、それが彼への連絡という行為に繋がらなかつた。黒澤の飄々とした顔や、着ていたシャツのディテールや、躊躇いがちに喫う煙草の煙の模様や、そんな事ばかりを思い出した。それから、雛子の若くて美しい踝も。

「覚えてないなら別にいいですよ」

いとも簡単にあつさりど、黒澤は真顔でそんな事を云う。昼下がりに、またしても雨。秋を少しずつ連れてやってくる、だからだと降り続く、雨。

まるでわたしの精神状態みたいだ。始まりも、終わりも曖昧な霧のよつな雨。

「テンちゃんがね、謝っておけっていうの」

眼前の黒澤は、すこし機嫌を損ねたような、傷ついた少年のような顔になって煙草を玩んでいる。これは、相当に酷いことがあったに違いない、とわたしは感じる。彼は基本的に温厚な人間だと思うし、何といてもあのヒナコの兄なのだ。

「責められたほうが楽なのは凜さんだけでしょう」

「そうかもしれないけど。でも、何も思い出せないの。だから教えてほしいの」

「…じゃあ言うけど」

「なに？」

「凜さんは俺のこと、どう思ってます？」

いきなり本題に入るこの青年の、そういう潔さは好ましくわたしの眼に映る。しかしそれは、自分が予先でない時に限られるのだ。すべてをグレーのまま、ゲームオーバーになるまでやり過ぎそうとするのは通用しないらしい。冗談めかして終わることの出来ない、妙に緊張感を持った黒澤にわたしは思わず俯く。自分の前に置かれたアイスティーをじっと見つめ、温かいほうにすればよかったと心の中で呟いた。

「質問に質問で返さないでよ」

「そうやって、また有耶無耶にしてほしくないよ。あの時、俺はそう聞いたんですよ、凜さんに」

そうか。そういうことか。独りごちてわたしは妙に納得する。わたしはその質問に答えなかったのだろう。だから黒澤は、こんな風に拗ねた子供みたいな状態になっているに違いない。

「嫌いじゃないわ。むしろ好きよ。あなたと一緒にいるのは楽しいわ」

「でも、凜さんはいつも変わらない。俺のことを話す時も、妹のことを話す時も、旦那さんのことを話すときも、いつも全部同じようにしか見えない。凜さんの考えていることが分からない。あなたの気持ち、何処に向いているのか、分からない」

搾り出すように白日のもとに晒された黒澤の本音に、わたしは困惑する。

「それが、嫌なんだ。俺はあなたのことを分かりたいと思う。あなたは、俺に対してそう思う？ どう思ってる？ それさえ俺には判らないんです。俺は相当に鈍い人間なんだろうかと思ったりします。そのうち、何も判らなくなっていく」

憂いを含んだ黒澤の、俯き加減の横顔は相当にセクシーで、わたしはその秀でた鼻梁に見蕩れる。綺麗な子。雛子に良く似た目元の黒澤を見るたび、雛子を思い出すのだといったら彼はまた機嫌を損ねるだろうか。

「分からなくて当たり前よ。だって、あなたはわたしじゃないんだもの」

わたしの気持ちはわたしにしか判らないし、わたし以外の人が知

る必要はない。わたしの心のうちは、わたしだけが分かっている。夫が離れていく悲しみも、雛子への嫉妬も、それは全部、黒澤のせいではないのだ。

「わたしの全部を背負い込むことと、好きは違う。わたしは、全部を綺麗に分かち合えるような人間じゃないの。こういう言い方は冷たく聞こえるかもしれないけれど、人はみんな一人よ。一人で生まれてくるの。誰とも、その生を分かち合うことは出来ないの。たとえ、身が千切れそうなほどに誰かを愛してても」

黒澤に、わたしの言葉は伝わるだろうか。数ヶ月前の、初めて会った喫茶店を思い出す。あの場所から、わたしはずっと動けずにいる。

× × × × × × ×

『こないださあ、雛子のお兄さんがうちの店に来たよ。リンさん、あの子に何言ったの?』

電話越しのテンちゃんは少し蓮っ葉な口調でわたしを詰問する。

「え? なにを?」

『何を、じゃないよ。会ったんでしょ? あの後』

苛立っているようなテンちゃんの声に、思わずわたしは姿勢を正した。ソファに寝転がったまま電話していると、叱られそうな気分になったからだ。もっとも、テンちゃんが見ているわけではないのだけれど。

「会ったけど…そのことで何か言ってたの」

『宇佐美さんは凜さんと付き合ってるんですか、って言われたよ』

「え!？」

『冗談も休み休み言えって。彼女は浮気が出るほど立ち回りがよくないよって言ったら、あの子、そうですねとか言うくせに、納得しないんだ。僕は君みたいな男の子にしかときめかないんだ、って言ってやったら酔いも醒めた顔してた。あの子氣づいてなかったんだね。僕なんかけっこう分かりやすいのにさ』

そういう嗜好がこの世に存在していることは理解していても、実際目の当たりにすることなど皆無だと　　そういう風に黒澤は考えていたのかもしれない。わたしが、夫の恋愛やわたしたちが別れる結果を、予測できなかったのと同じように。

「それとなく感じていても、面と向かって言われたらけっこう衝撃なんじゃない？　少なくともわたしは衝撃だったわ」

受話器越しにテンちゃんが鼻で笑う。

『真顔で”へえ、そうなの”でお終いにしたくせに』

「顔に出ないタイプなの」

『そんなの、知ってる』

子どもの頃からずっと言われ続けてきたことだ。両親でさえ、6歳のわたしを持てあましていたな、と今なら分かる。感情が顔に出

ないタイプなのか、あるいは、本当のところでは何も考えず、何も感じていないのではないか。小学校に上がる年、母はわたしを発達不全ではないかと病院に連れていこうとしたのだった。あの頃と、何一つ成長しない。何も変わらない。大人のなりをした子どもに過ぎないわたしの、何を理解出来ないと言っただろう。

「黒澤くんに言われたわ。あなたの考えてることが分からないって。どんな時も感情が見えないって。それってそんなに、いけないことなのかしら」

落ち込んでるの？ とテンちゃんが訊くので、わたしはいいえ、と答える。別に落ち込んでいるわけじゃあ、ないのだ。

『リンさん、自分で気付いてないみたいだけど、黒澤くんのことけっこう好きなんじゃないのかなあ』

「まさか」

私は言下に否定する。

『だってさあ、リンさんて他人に構わないでしょう。興味なかったら徹底的だし。いくら旦那の恋人の兄だって言っただって、幾らかでも好きって思ってたなかったら、頼まれたって一緒に出かけたりしないでしょうっ。』

「そんなこと云ったら、わたしはテンちゃんが大好き過ぎてしょうがないって事になっちゃうじゃない」

わたしたちは実際とても仲がいいのだ。週に2回は騒のカウンターに座っているのだし、そのほかにも都合が合えば一緒にご飯も食

べにゆくし、中間地点にあるみどり公園　　正しい名前は別にあるが、植物園のごとく緑が生い茂っているので勝手にこう呼んでいる　　でくだらない話を延々としたりする。

実際僕のごとは大好きでしょ？　僕らは隣人愛だけだね

とうそぶくテンちゃんは、あんまりにも自信満々だ。でも、彼のその過剰な自信に、幾度となく助けられているのは確かだ。わたしはだんまりを決めたまま、受話器を耳に当てたまま天を仰いだ。

テンちゃんは何でもお見通しだ。そして、わたしは自分のことさえ雲を掴むような真似しか出来ない。わたしはあまりにも自分とは違うテンちゃんを、好ましく思うし失いたくはない。夫だって、本当なら失いたくはなかったのかもしれない。でも、もうわたしには分からなくなっていた。

「わたしは間違っても、恋なんて恐ろしいものに人生を捧げる気はないの。秋彦は、そういうことを分かっているのだと思ってた。だからわたしと、静かな生活を送ってくれるんだって。でも、そうじゃなかったのね。黒澤くんもそうなのかしら。だとしたら、そこにわたしの居る場所なんて、はじめからないのよ。あの人がわたしの何を好きだと思つのかも、さっぱりわからない。理解出来ない。わたしが男だったら、ヒナコみたいな女の子を好きになるわ、きっとあの子の考え方も温度も、到底理解出来ないものではあるけれど」

「　　だから、秋彦さんを許したっていつの？　ばかみたい、そんなの。じゃあ最初から、リンさんと秋彦さんとヒナコで付き合えばいいじゃない。黒澤くんは心底嫌がるかもしれないけどさ」

テンちゃんの口調は心配半分、面白がっているのが半分。そうに違いない。声音で分かる。実害のない事件は愉しむに値するものだ。

わたしたちはそう思っている。しかし、そんな不謹慎な愉しみを、世間は許さないのかもしれない。あるいは、良識の塊の、黒澤尚人は。

「今更蒸し返すつもりで云ったんじゃないのよ。やり直しが利くなんて、全部嘘よ。この世は全部、やり直しなんか利かないの」

一度其処を出たら、もう元の場所に戻ることは出来ないのだ。だからわたしは、実家に戻ることはもうないし、夫と再び生きることもない。わたしの人生は、そうやって出来ている。事態はめまぐるしく移り変わっていくのに、それでもなお、同じ場所に立っているわたしはどうしたことだろう。あるいは、これも錯覚なのだろうか。

10 メビウスの色(後書き)

作業BGM:”Welcome to the Jungle”
Music by 2CELLOS

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2642r/>

デルタ・ブルー

2011年12月11日16時27分発行